

秋田県文化財報告書第49集

鳥野遺跡発掘調査報告書

1978. 3.

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財七号

序

鹿角大規模農道は、鹿角市乳牛から鹿角郡小坂町万谷に至る総延長18,136mに及ぶ農道であります。

この農道予定路線地域には数多くの遺跡が所在するため、昭和49年以来事前発掘調査を実施してきましたが、本年度は農道関係最終年の調査として、

鹿角市花輪平元字鳥野所在の「鳥野遺跡」及び隣接地「源田平遺跡」の発掘調査を実施し、記録保存の上、今後の研究に資することとしました。

調査及び本報告書の刊行にあたり、協力をいただいた調査員の方々、鹿角市教育委員会に対して心から感謝の意を表する次第です。

昭和53年3月

秋田県教育委員会

教育長 畠山芳郎

例 言

1. 本報告は、鹿角大規模農道関係遺跡である鹿角市花輪平元字鳥野および花輪平元字源田平に所在する遺跡の発掘調査報告である。

2. 発掘調査は、昭和52年7月25日から8月7日まで行った。

3. 調査主体者は、秋田県教育委員会である。

4. 調査担当者 大里勝蔵、庄内昭男

5. 調査参加者

調査補助員 藤原妃敏（東北大大学院）、小林克（早稲田大学）、藤沢昌（秋田大学）

石井雪子、佐藤恵津子、富沢厚子、松岡悦子、古川孝政、田原貴代志、

兎沢司、木村徳光、村木正敏、兎沢久雄、佐藤浩司、木村正彦、中村実、

奈良修、石川陽一、高橋正和、鎌田正明、黒沢秀一、安保洋子、山本幸一、

安保尚知、湯沢宗広（以上県立十和田高等学校社会部）

地元協力者 佐藤フミエ、柳沢梅子、三上トヨ、安村澄子、安村かよ、児玉三郎、

児玉四郎

整理作業協力者 小林克、庄内公子、進藤由紀子、佐藤清美、小林美保子、尾張谷信子

6. 調査協力機関 鹿角市教育委員会、鹿角市立平元小学校、県立十和田高等学校

7. 本報告の執筆、編集は庄内昭男が担当した。

8. 遺構、遺物について

遺構は、 $\frac{1}{40}$ 、 $\frac{1}{20}$ で平板測量した。本報告書の遺構実測図は任意の縮尺となっており、スケールを付している。

遺構に付した矢印の方向は、すべて磁北である。

土器の実測・トレースは庄内昭男が、石器の実測・トレースは庄内公子が行った。

報告書中の出土遺物の実測図は、土器を $\frac{1}{3}$ 、土製品・鉄器・石器を $\frac{1}{2}$ に縮尺した。なお土器は、残存の割合に応じて、口縁部が $\frac{1}{2}$ 未満から $\frac{1}{4}$ 以上残るものは、中軸線付近の両側を一部、 $\frac{1}{4}$ 未満から $\frac{1}{8}$ 以上残るものは、中軸線の両側 $\frac{1}{2}$ の一部を空白にした。

遺構の凡例



9. 図版について

遺構及び出土遺物の写真撮影は、庄内昭男が行った。報告書中の遺物写真は、任意の大きさである。

目 次

序

例 言

I 遺跡の立地と環境	1頁
II 発掘調査の概要	2頁
1. 発掘調査にいたる経過	
2. 発掘調査の方法	
3. 調査日誌	
III 検出遺構と出土遺物	8頁
鳥野遺跡住居跡	8頁
一出土遺物一	
鳥野小竪穴遺構	15頁
一出土遺物一	
源田平遺跡第1号住居跡	16頁
一出土遺物一	
源田平遺跡第2号住居跡	23頁
一出土遺物一	
IV その他の出土遺物	28頁
V まとめ	30頁

挿図目次

第1図	地形図一五万分の一	1頁
第2図	周辺地形図	3頁
第3図	鳥野遺跡発掘区平面図	6頁
第4図	源田平遺跡発掘区平面図	7頁
第5図	鳥野遺跡住居跡	9頁
第6図	鳥野遺跡住居跡カマド	10頁
第7図	鳥野遺跡住居跡出土遺物(1)(2)	13・14頁
第8図	鳥野小竪穴遺構	15頁
第9図	鳥野小竪穴遺構出土遺物	15頁
第10図	源田平遺跡第1号住居跡	17頁
第11図	源田平遺跡第1号住居跡カマド	18頁
第12図	源田平遺跡第1号住居跡出土遺物(1)(2)	21・22頁
第13図	源田平遺跡第2号住居跡	24頁
第14図	源田平遺跡第2号住居跡カマド	25頁
第15図	源田平遺跡第2号住居跡出土遺物	27頁
第16図	源田平遺跡第2号住居跡埋土出土土器	28頁
第17図	その他の出土遺物(1)(2)	29頁

図版目次

図版1	鳥野遺跡遠景
	鳥野遺跡発掘作業風景
図版2	鳥野遺跡住居跡全景
	カマド
図版3	鳥野遺跡住居跡カマドと遺物出土状況
	カマドと石の配置状況
図版4	鳥野遺跡住居跡カマド土器と石の配置状況

鳥野遺跡住居跡カマド石の配置状況

△ カマド煙道と煙出し口

図版 5 鳥野遺跡発掘状況

鳥野小竪穴遺構

図版 6 源田平遺跡発掘作業風景

源田平遺跡遠景

図版 7 源田平遺跡第 1 号住居跡埋土の状況

△ 全景

図版 8 源田平遺跡第 1 号住居跡カマド上面の土層

△ カマド全景

△ カマド煙道部

図版 9 源田平遺跡第 1 号住居跡カマド燃焼部

△ カマドの掘り方

△ P₃の炭化した柱

図版10 源田平遺跡第 2 号住居跡を履う大湯浮石層

△ 埋土の状況

図版11 源田平遺跡第 2 号住居跡全景

△ カマド全景

図版12 源田平遺跡第 2 号住居跡カマド近景

△ カマド煙道部断面

図版13 源田平遺跡第 2 号住居跡カマド煙道部先端断面

△ カマドの掘り方

△ 柱穴と柱痕跡

図版14 鳥野遺跡住居跡出土遺物 (1)

図版15 鳥野遺跡住居跡出土遺物 (2)

図版16 源田平遺跡第 1 号住居跡出土遺物 (1)

図版17 源田平遺跡第 1 号住居跡出土遺物 (2)

図版18 源田平遺跡第 2 号住居跡出土遺物

図版19 鳥野小竪穴遺構出土土器 鳥野露出住居跡断面出土土器

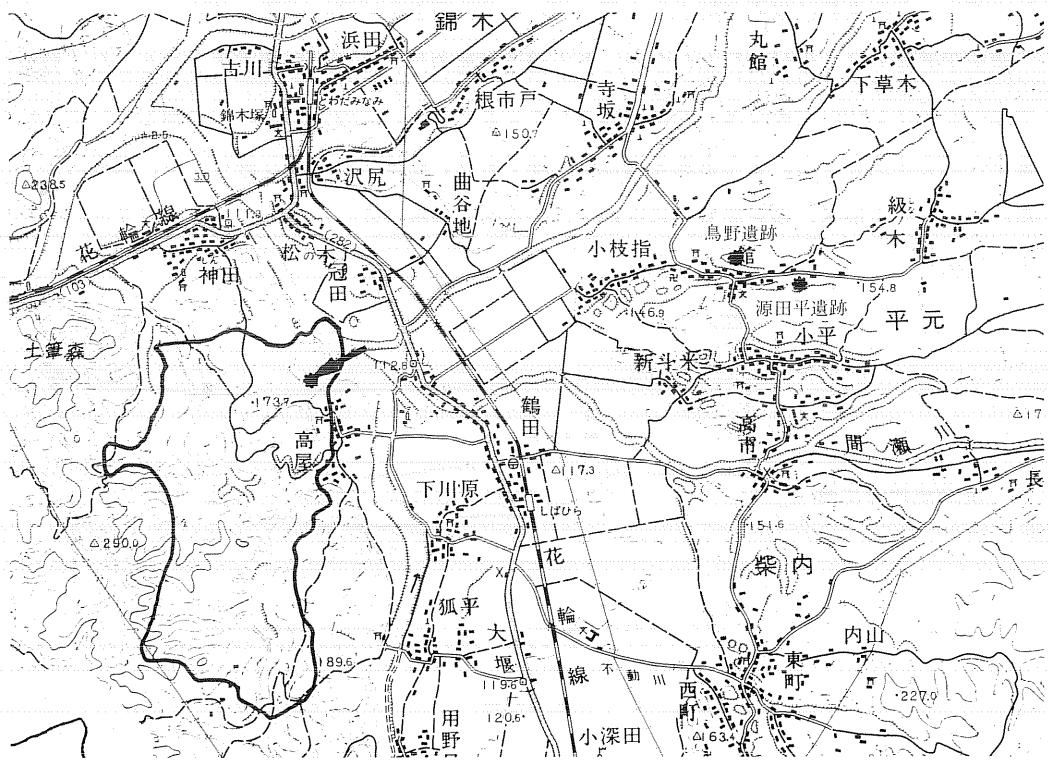
源田平遺跡表採石器 源田平遺跡第 2 号住居跡埋土内出土土器

図版20 器面調整

I 遺跡の立地と環境

鳥野遺跡は、秋田県鹿角市花輪平元字鳥野13に所在する。花輪町より出て北流する米代川の流域の東側は平野部が発達しており、広い水田地帯となっている。この水田地帯の東側には標高150m前後の段丘があり、水田面との比高は40m程である。とくに米代川に注ぐ小支流の間瀬川、根布川の間は、山すそがなだらかで東西に長くのびる舌状台地が発達している。こうした台地上には縄文時代から平安時代までの遺跡が点在している他、空堀によって分断された中世の館跡もある。南から新斗米館、小平館、小枝指館である。鳥野遺跡は、小枝指館に続く台地上にあり、遺跡の下を走る道路と深い谷が台地の西を走っている。この道路は鹿角市花輪と大湯を結んでおり、両町の中間に遺跡の位置があり、もよりの国鉄十和田南駅より、南東に3km来る。台地はかなり広い面積で畠地あるいはリンゴ園として利用されている。なお枯草坂古墳は水田面をへだてて北西1.5kmの地点にある。

源田平遺跡は、鹿角市花輪平元字源田平35にあり、やはり小枝指館とは1本の道路でつながっており、鳥野遺跡から南東に0.5kmはなれている。遺跡のある台地は南側に向き、西側に深く谷が入り込んでいる。水田面をへだてて小平館の方向をのぞめ、現在は畠地として利用されている。



第1図 周辺地形図 五万分の一

II 発掘調査の概要

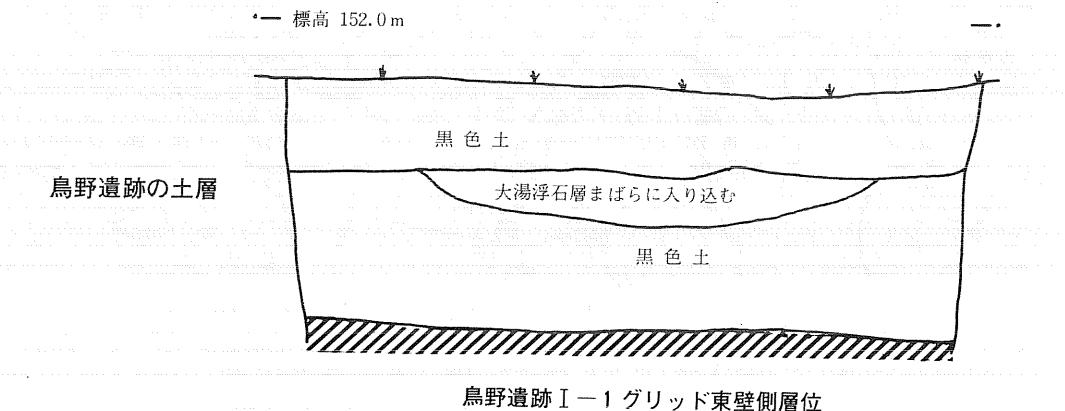
1. 発掘調査にいたる経過

鳥野遺跡は鹿角市花輪から大湯に通じる道路によって、台地西側が一部削平されて、住居跡断面が切りどおしに露出していた。台地上には広範囲に遺跡が所在する可能性があり、遺跡の性格を確認するために調査することとなった。また源田平遺跡は、鳥野遺跡より南東に 0.5km 離れており、昭和52年の春に開墾のため上面を削平したところ大湯浮石層とともに須恵器など土器片が出土したと土地所有者より鹿角市教育委員会に連絡があった。大湯浮石層が浮いた部分の作付をのこしてもらい、道路より離れているが、鳥野遺跡や付近の遺跡との関係をさぐるために調査を進めることとなった。

2. 発掘調査の方法

鳥野遺跡の発掘予定面積は 150m²で、発掘区域は土地所有者との話し合いで、畠地の半分だけが調査可能であった。三角形の畠地で西側に任意にグリッドを設定した。道路上のコンクリート土手際を原点として、北西方向に向けてグリッドを設定した。基準線は磁北より 5 度西にかたむいている。南北軸を A ~ I までのアルファベットで、東西軸を 1 ~ 7 までの算用数字にし、グリッドの名称は南東の杭でよんだ。グリッドの大きさは 2 m × 2 m である。

源田平遺跡では、作付の行われなかった大湯浮石層の浮いた部分を調査することとし、発掘予定の面積は 100 m²であった。今後調査されることを考え、この発掘区に中軸線をもつように基本の点を 4 点とった。また台地先端はカヤ地であり、土地所有者より許可を得、調査区とした。カヤ地をイ地区、他を北方向に口地区、ハ地区と仮称した。イ地区には 2 m × 2 m のグリッドを組んだ。





第2図 周辺地形図

3. 調査日誌

7月25日

作業は鳥野遺跡から開始した。午前中は発掘担当者、大学生2名、作業員5名で、鳥野遺跡のグリッドを設定し、繩張りをした。B1、D1、E1の北半、E1の南半グリッドを掘りはじめる。午後道路を隔てた調査区外に検出された小堅穴遺構のプランを確認した。

7月26日

この日朝より十和田高校社会部第1班8名が調査に加わる。D3、D5、E5の北半、E5の南半グリッドを調査する。鳥野では、大学生1名の他女子高校生3名を小堅穴遺構の調査に入れる。D5グリッドの西側に厚い大湯浮石層の堆積が検出された。午後より作業員5名で源田平遺跡のカヤ払いをしてもらう。

7月27日

高校生が1名加わる。調査区外の小堅穴遺構の平面図を記録する。鳥野D5グリッドで検出された大湯浮石層の範囲を確認するため、D6グリッドの中央部にベルトを残しD7グリッドまで拡張した。H1、E7北半、E7南半グリッドを調査した。周辺をボーリング調査したが遺構の可能性はうすく、鳥野ではD5、D6、D7グリッドの調査区以外の調査を終えた。午後、源田平遺跡イ地区にグリッドを設定した。鳥野では大湯浮石層の部分を掘り下げ、地山まで達した。掘り込み面を確認し、第1号住居跡とした。土層観察のためのベルトを残し、埋土を床面まで掘り下げる。

7月28日

高校生が4名加わる。前日より大学生1名と女子高校生4名を鳥野に残し、第1号住居跡床面の精査を行う。ベルトの両わきにかなりの土器が出土していた。午前中に南北セクションと東西セクションを記録する。源田平遺跡のイ地区のグリッドの調査では検出した遺構はなかった。ハ地区を四分し、大湯浮石層を取りはずし北西側を掘る。深さ1mで床面に達し、片側に壁の部分が検出され、調査区を拡張する。午後鳥野では、住居跡のベルトをはずし、カマドを検出した。またグリッドの1ラインの南北セクションを記録した。

7月29日

大学生1名加わる。午前E6グリットを100×60cmの幅に拡張し、煙出し口を検出した。第1号住居跡カマドを精査する。午後土器をとりあげる。鳥野の地形を測量する。源田平では前日に引き続きハ地区の調査を行い住居跡の掘り込み面のプランを確認した。長軸4m20cm、ほぼ方形を呈し、東側にカマドがつく。源田平遺跡第1号住居跡とする。

7月30日

午前鳥野遺跡第1号住居跡平面図を記録する。午後にはカマド平面図の作成にかかり、土器

をとり上げながら行う。カマドセクションを記録する。全景写真撮影を含め、鳥野の調査を終了した。源田平遺跡第1号住居跡では、午前よりベルトの部分以外の埋土をとり除く。床面まではがし、セクションを記録する。また口地区の調査区を設定し、残りの人数で表土はぎを行う。この日、林謙作氏訪れる。

7月31日

午前中より作業員5名によって鳥野遺跡第1号住居跡をのぞいたグリッドと源田平イ地区の埋戻しを行う。源田平遺跡第1号住居跡のセクション図を記録し、午後にベルトをはずす作業を行う。口地区を南北に拡張し、大湯浮石層の範囲を確認することにした。

8月1日

午前源田平遺跡第1号住居跡の床面およびカマドの精査を行う。昼で高校生第1班が交替し、9名入る。午後より平板測量をする。ハ地区の例から大湯浮石層と遺構との関係がつかめたので口地区の浮石層の範囲全体を出すこととした。口地区を源田平遺跡第2号住居跡とする。

8月2日

午前中に第1号住居跡の平面図の記録を終え、断面図を記録する。又全景写真も撮る。この他カマドの構築方法をみるために、カマドを六分し、カマドセクションを記録する。第2号住居跡では、大湯浮石層をはずし、埋土をとり除く。東側がカマドのようで白色粘土を検出した。平板をすえ、遺物の出土位置を記録する。

8月3日

源田平遺跡第2号住居跡の埋土除去、ベルトとカマド上面を残し、床面まで埋土をとり除く。

8月4日

源田平遺跡第2号住居跡のベルトセクションを記録する。午後には、ベルトをはずし、ほぼプランが確認された。

8月5日

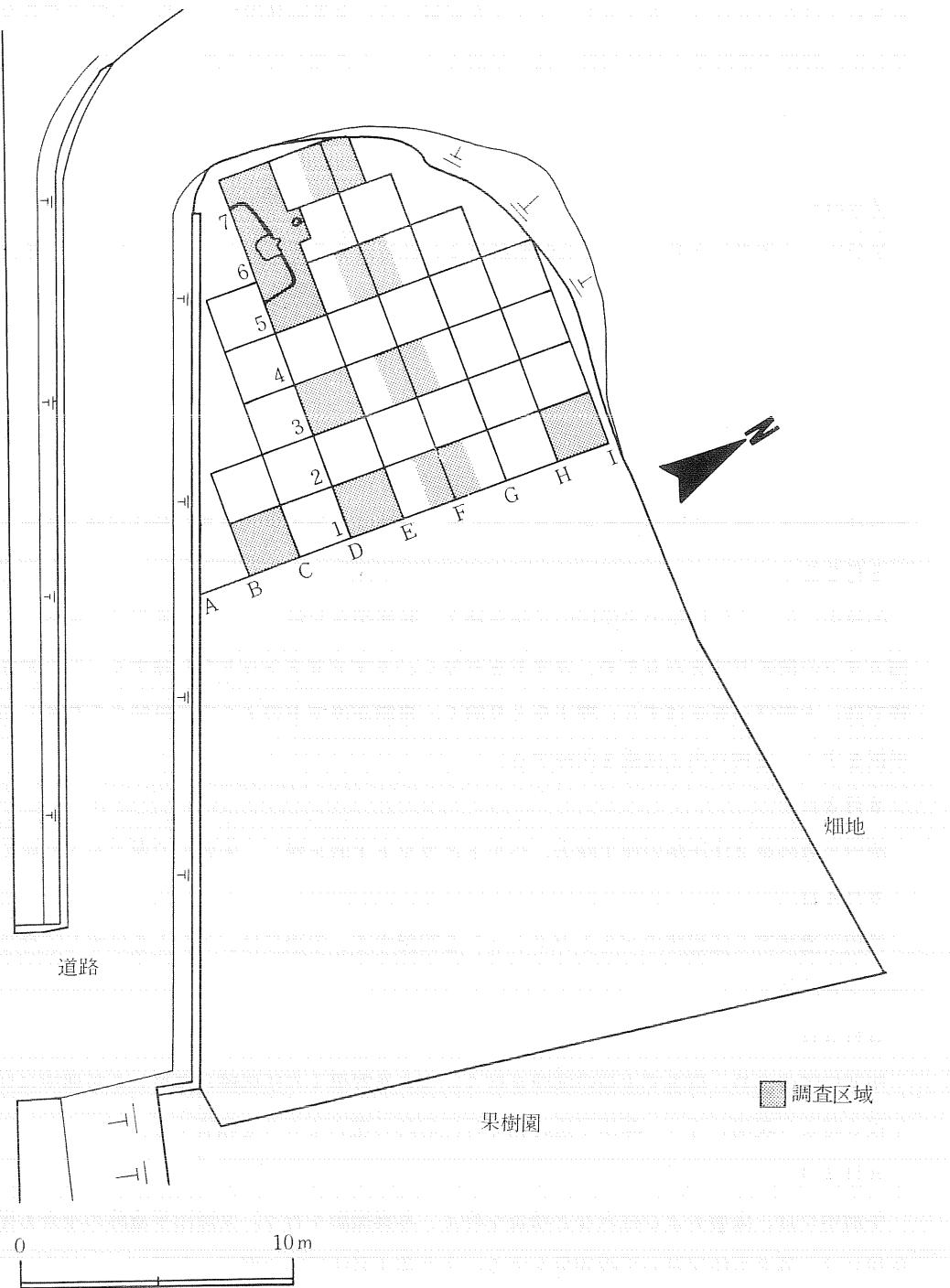
午前中雨のため、宿舎で土器の洗浄を行う。なお鳥野第1号住居跡の埋戻しを午前中に行う。午後3時より現場に行き、源田平遺跡第2号住居跡の壁のまわりを精査する。

8月6日

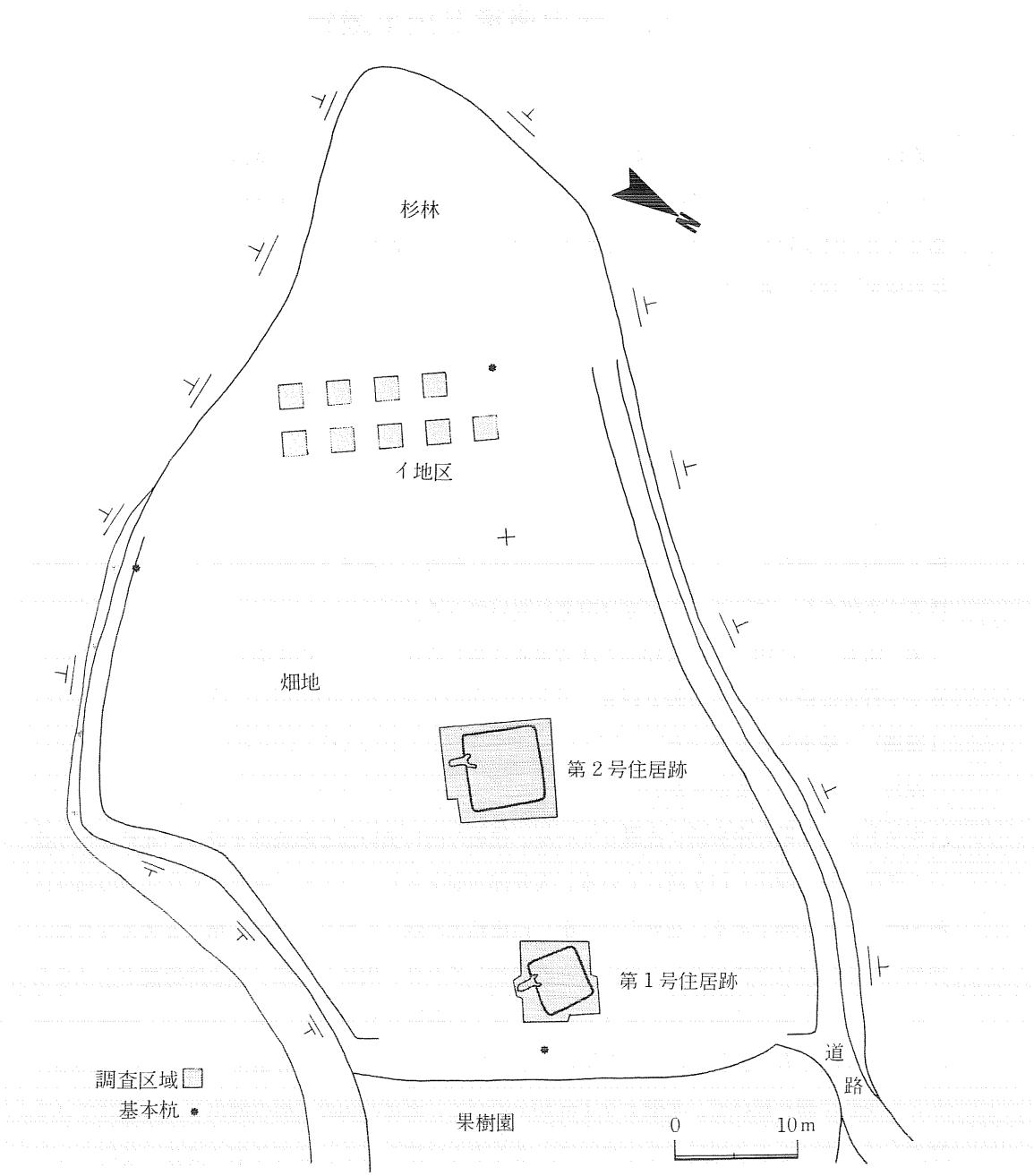
午前中には、床面および柱穴など精査を終え、写真撮影を行う。又源田平遺跡の全景も撮る。午後には、第2号住居跡の平板測量をする。また第1号住居跡の埋戻しも平行して行う。

8月7日

午前高校生第1班の6名が加勢し、第1号住居跡の埋戻しを行う。第2号住居跡のカマド部分の立ち割りを行い断面図と、掘り方の平面図を記録する。午後より埋戻しに全力をそそぎ、午後5時に調査を完了した。



第3図 鳥野遺跡発掘区平面図



第4図 源田平遺跡平面図

III 検出遺構と出土遺物

遺構は、鳥野で竪穴住居跡1軒と調査区外に小竪穴遺構を、源田平遺跡では竪穴住居跡2軒を検出した。本文の説明は鳥野遺跡竪穴住居跡、小竪穴遺構、源田平遺跡第1号竪穴住居跡、第2号竪穴住居跡の順序で行い、遺構の説明の次に出土遺物の説明を加えた。

鳥野遺跡住居跡（第5図）

住居跡の南側には道路がせまつていて調査ができなかった。

（遺構の確認） D 5 グリッドの西側に表土下20cmで厚い大湯浮石層の堆積を確認し、D 6、D 7 グリッドの東側までつながり半円形のプランとなった。この大湯浮石層を除去し、地山まで掘り下げて住居跡の北側の掘り込み面を確認した。

（平面形・方向） 北側の一辺と東西のコーナー部が確認されただけであり、この住居跡の規模・平面形は判然としない。北辺はやや弓なりに弯曲し、長さ 3m 50cm であり、コーナー部はゆるく丸味をもっている。カマドは磁北に向いている。

（壁・床面） 北側の壁高は40cmでほぼ垂直に落ち込み、地山中の床面となる。床面は平坦でカマド付近は踏みかためられている。

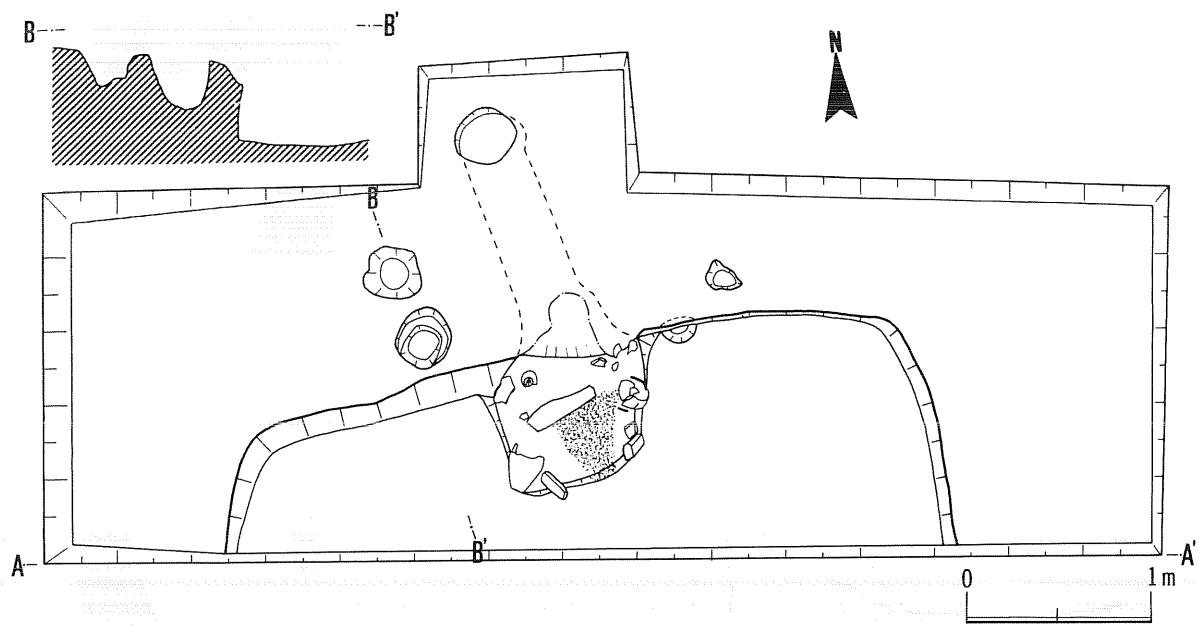
（周溝） 検出されなかった。

（柱穴） 検出されなかった。

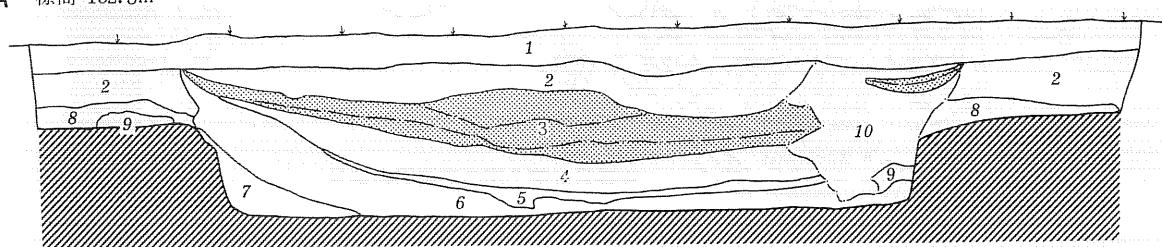
（カマド） 北壁の中央部に位置している。住居の内に焚口部と燃焼部を設け、北壁を掘り抜いて住居の外に煙出し口を設けている。天井部が削平されているが、遺存する住居内の部分は幅80cm、高さ20cmである。左袖のつけ根に白色粘土が残っており、カマド積土と考えられた。

両袖の先端には立方体状の石を地山に立て補強しており、両袖の中位には土師器甕がふせてあり袖芯として土器が使用されたようである。焼土の範囲から焚口部の幅は20cmで、燃焼部は幅が広がり45cmであり、焚口部から燃焼部へ上り勾配となっている。煙道部は地山を直径30cmのトンネル状に掘り抜いて、北壁より 1m 10cm のびて、直径30cmの円形の煙出し口に通じている。煙出し口に向けて下り勾配となっている。なお中央に横たわる石は天井部の補強に使用されたようであり赤く焼けている。使用状況は焚口部から燃焼部にかけて使われていたと考えられる。焼土の範囲は堅い火床面となっていた。この焼土範囲とカマド上面、右袖わきの床面にかけて多量の土器が散乱していた。

（その他の施設） カマドの右袖より10cm離れて、壁の部分をやや掘り込んだ直径20cm、深さ15cmの小ピットがあり、内黒土師器杯の口縁部が出ている。

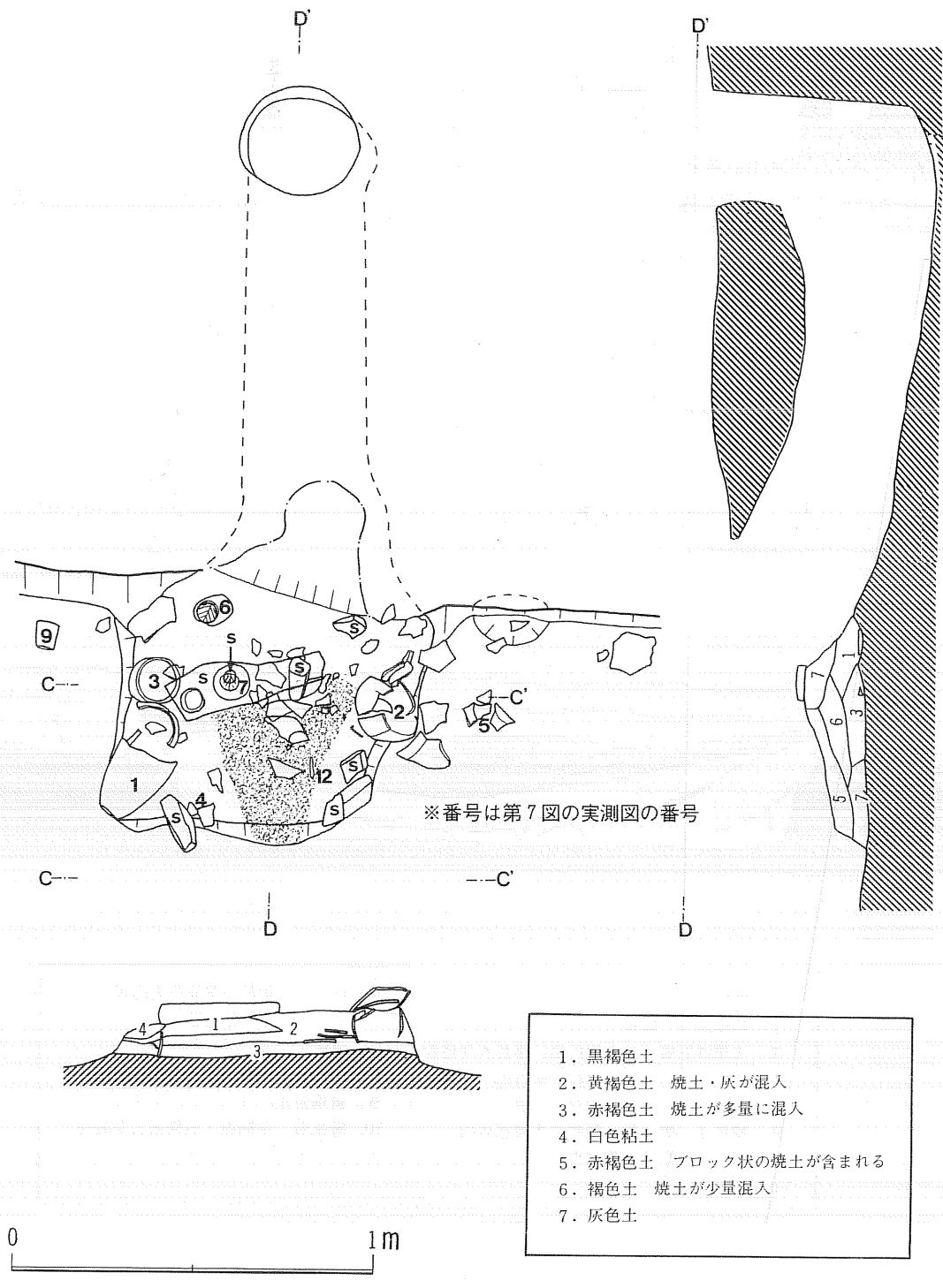


A- 標高 152.3m



- | | |
|--|-------------------------------|
| 1. 黒色土 耕作土 | 6. 褐色土 細粒の黄褐色火山灰
土一様に混入 |
| 2. 暗褐色土 軟質 | 7. 黒色土 |
| 3. 大湯浮石層
a. 褐色土に浮石入り込む
b. 砂粒・黄白色
c. 粗粒・白色 | 8. 黄褐色土 地山が浮き上ったもの
9. 黄褐色土 |
| 4. 褐色土 烧土粒・粗粒の黄褐色火山
灰土一様に混入 | 10. 攪乱層 茶褐色・黒褐色土が混在 |
| 5. 黒色土 | |

第5図 鳥野遺跡住居跡



第6図 鳥野遺跡住居跡カマド

鳥野遺跡住居跡出土遺物（第7図）

カマドとその周辺から出土したものである。土師器壺1～4、6、7はカマド内に出土し、袖芯や支脚用に代用されたものもある。土師器壺は壁面上面の大湯浮石層下から、また紡錘車も埋土中より出土し、右袖の近くのピットからは内黒土師器杯の口縁部破片が出土している。

土師器壺1（第7図-1） 口径17.4cm、現高26.4cm。底部が欠損している。

〈色調・胎土・焼成〉 色調は灰黄色を呈しており、胴部外面に黒斑がある。胎土は緻密で焼成も良好である。

〈器形・調整〉 最大径は口縁部にある。なだらかな長胴で頸部にかるく段をもち、口縁部は短く「く」の字状に外反する。口唇部はわずかに突き出る。調整については、胴部外面には縦方向のシャープな刷毛目状痕が残っており、工具のあたった部分の線が2mm程斜めを向いている。口縁部外面にはヨコナデが施されている。調整の順序としてはヨコナデが先である。内面では口縁部先端から底面まで横方向に幅1～2.5cmのシャープな刷毛目状痕が残っており、底面では工具のあたりが斜方向についている。胴部下半外面は二次的な火熱により剝離している。

土師器壺2（第7図-2） 口径18.4cm、現高21.9cm。胴部下半から底部が欠損している。

〈色調・胎土・焼成〉 外面は黄褐色を呈しており、胎土は緻密で焼成も良好である。

〈器形・調整〉 最大径は口縁部にある。筒形の長胴で頸部に段をもち、するどく入り込んで口縁部は「く」字状に外反する。口縁部の器壁が胴部の二分の一程に薄くなっている。胴部外面は凸凹であるが、内面はなめらかなつくりである。調整については、胴部外面には幅5mmのこまかい縦方向の刷毛目状痕が、内面には幅1.5～1.8cmの横方向の刷毛目状痕が残っている。

口縁部内外面には二度にわたってヨコナデが施されている。胴部上半外面に炭化物が付着する。

土師器壺3（第7図-3） 口径14.5cm、高さ18.4cm、底径7.0cm。ほぼ完形である。

〈色調・胎土・焼成〉 外面は黄褐色を呈しており、胎土は緻密で焼成は良好である。

〈器形・調整〉 最大径は口縁部にある。底部は安定性のある平底で、底辺部がやや突き出している。中位にふくらみをもつ長胴で頸部に段をもち、口縁部は「く」字状に外反する。口唇部はわずかに突き出る。胴部内外面は凸凹があるつくりで内面中位に1mmの段で輪積み痕が残っている。調整については、底部には木葉痕を残し、底辺部は指頭によっておさえている。胴部外面には幅6～9mmの縦方向の刷毛目状痕が、内面には幅8～15mmの横および斜方向の刷毛目状痕が残っている。内面の調整痕が判然としており、工具のあたりが残っている。口縁部内外面にはヨコナデが施されている。内面には炭化物がこびりついていた。

土師器壺4（第7図-4） 口径13.8cm、現高11.6cm。口縁部が三分の一だけ残っている。

〈色調・胎土・焼成〉 赤褐色を呈しており、胎土に砂が混入し、焼成は比較的良好である。

〈器形・調整〉 頸部にかるく段をもち、口縁部は外反し、先端で短く立ち上る。調整については、胴部外面の上半にはヘラミガキ痕が、下半には幅7mmの刷毛目状痕が残っている。内面はなめらかである。口縁部外面にはヨコナデが施されている。

土師器壺5（第7図-5） 口径15,0cm、現高7,7cm。口縁部が三分の一だけ残っている。

〈色調・胎土・焼成〉 暗赤褐色を呈しており、胎土は比較的緻密で焼成はややわるい。

〈器形・調整〉 頸部に段をもち、口縁部は「く」字状に外反する。調整については、胴部外面には幅7mmの縦方向の刷毛目状痕が、内面には横、斜方向の刷毛目状痕が残っている。口縁部内外面にはヨコナデが施されている。

土師器壺6（第7図-6） 底径7,2cm、現高9,8cm。胴部下半から底部が残っている。

〈色調・胎土・焼成〉 黄褐色を呈しており、胎土は比較的緻密で焼成は良好である。

〈器形・調整〉 底辺部が突き出し、安定性のある平底である。調整については、底部に木葉痕を残しており、底辺部は指頭でナデている。胴部外面には縦方向の刷毛目状痕が、内面には幅6mmの横方向の刷毛目状痕が残っており、工具のあたりは半月形である。

土師器壺7（第7図-7） 底径7,6cm、現高8,3cm。胴部下半から底部が残っている。

〈色調・胎土・焼成〉 外面は赤褐色を内面は暗褐色を呈している。胎土は比較的粗いが、焼成は良好である。

〈器形・調整〉 底辺部がやや突き出し、安定性がある。胴部外面の器壁はなめらかであるが、内面は凸凹があり、ザラザラしている。調整については、底部に木葉痕を残しており、胴部外面には幅4～5mmの縦方向のこまかい刷毛目状痕が、内面には幅9～10mmの横方向の刷毛目状痕が残っており、工具のあたりは半月形である。内面底には指頭によるおさえの痕がある。

土師器壺1（第7図-8） 口径18,0cm、現高22,7cm。底径はおよそ6cmであろう。口縁部から胴部にかけて半分以上が欠損し、底部は剝落している。

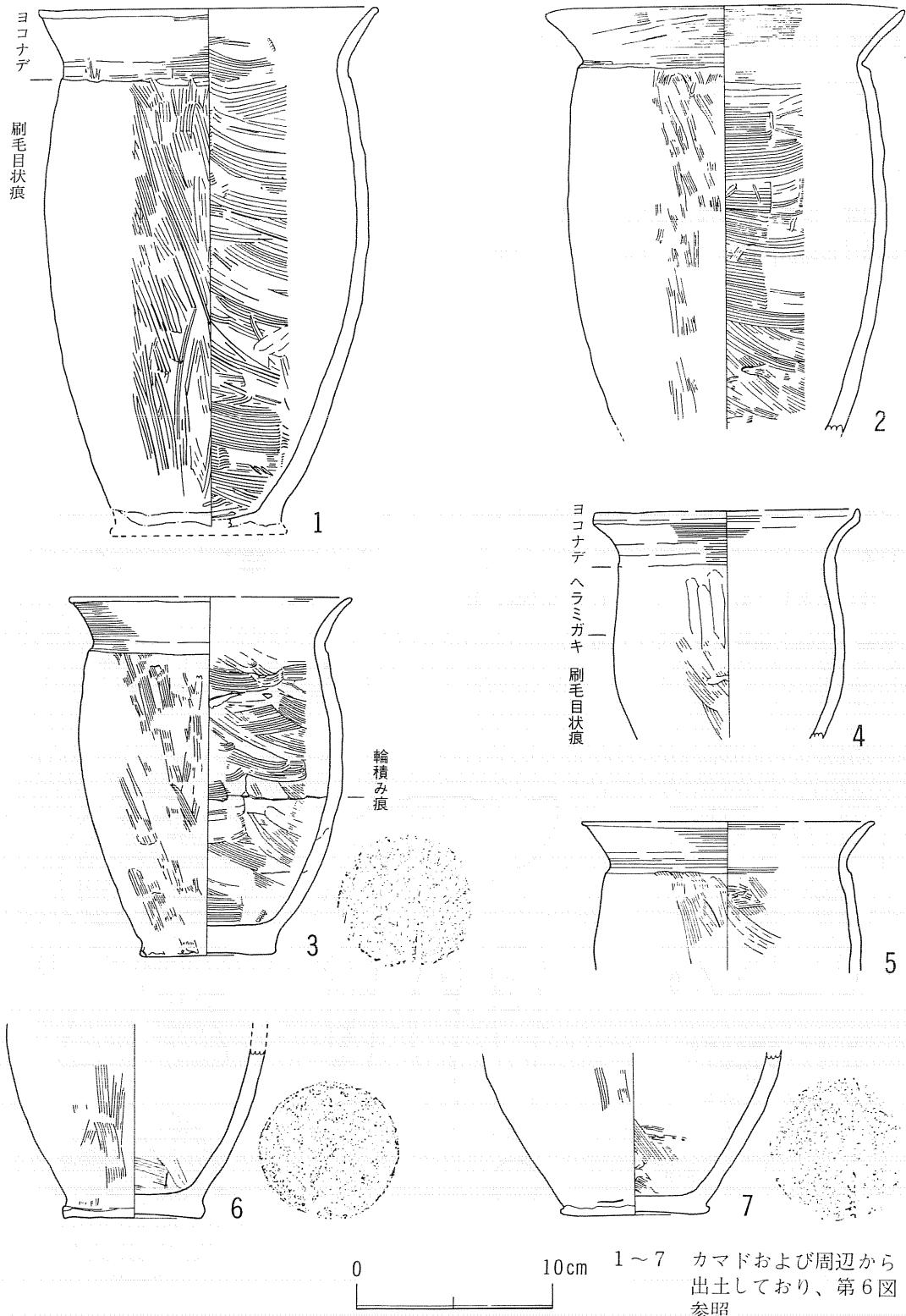
〈色調・胎土・焼成〉 赤褐色を呈しており、胎土には砂、小石が多量に混入しており、粗い。焼成は比較的良好である。

〈器形・調整〉 胴部上半に最大径をもち、径21,0cmを測る。円形を呈する胴部より頸部がかなりくびれ、口縁部が「く」字状に外反する。口唇部がやや突き出す。頸部よりやや下に2条と胴部下半に2条の輪積み痕が残っているが、内外面とも器壁はなめらかである。調整については、胴部外面には単位のわからないところもあるが幅5mmのこまかい刷毛目状痕が残っており、胴部上半の内面には調整痕がないが、下半から底面にかけて幅5mmで長くシャープに縦方向の刷毛目状痕が残っている。口縁部外面にはヨコナデが施されている。

筒形土製品（第7図-9） 最大幅が6,8cm、高さが6,2cm。

〈色調・胎土・焼成〉 黄灰色を呈しており、胎土は緻密で焼成も比較的良好である。

〈器形・調整〉 円筒状を呈しており、上部先端が先細るのに対し、下半は平らで安定性があ



第7図(1) 鳥野遺跡住居跡出土遺物

る。外面は手作りによる指頭の凸凹があり、部分的に刷毛目状痕の残るところもある。内面にも刷毛目状痕が残っており、下方を指でおさえている。

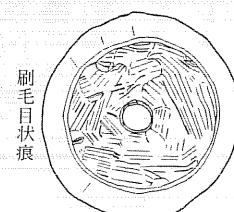
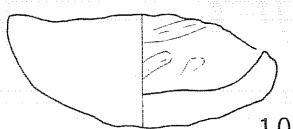
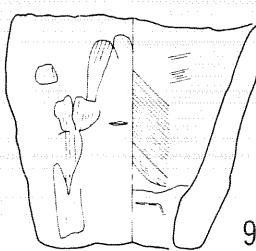
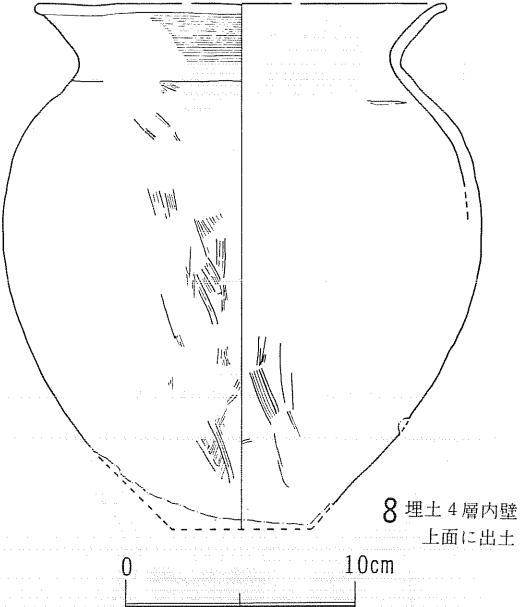
手捏ね土器（第7図-10） 口径 7.3cm、高さ 3.1cm

〈色調・胎土・焼成〉 黄褐色を呈し、胎土は緻密であるが、焼成は不良である。

〈形態・調整〉 口縁部は橢円状にゆがんでおり、外面は指頭の凸凹があり、内面は指ナデで調整しているが、亀裂が入っている。

紡錘車（第7図-11） 直径 4.0cm～5.4cm、高さ 2.3cm。上面は赤褐色を下面は黒色をしている。上面下面ともに刷毛目状痕が残っており、側面は幅 1cm で縦方向にケズリが施され、後に上面のふちに沿って横方向のケズリが施されている。

棒状土製品（第7図-12） 長さ 6.0cm、最大幅 1.7cm。明褐色を呈している。

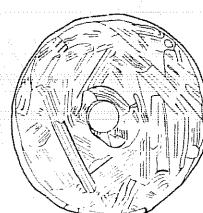
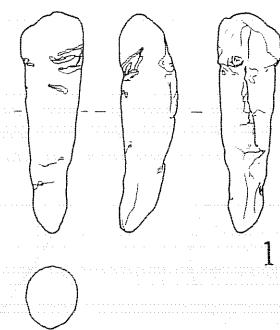


9. カマド左側より出土

10. カマド煙道部出土

11. 埋土第4層内出土

12. カマド内より出土



第7図(2) 烏野遺跡住居跡内出土遺物

鳥野小豎穴遺構（第8図）

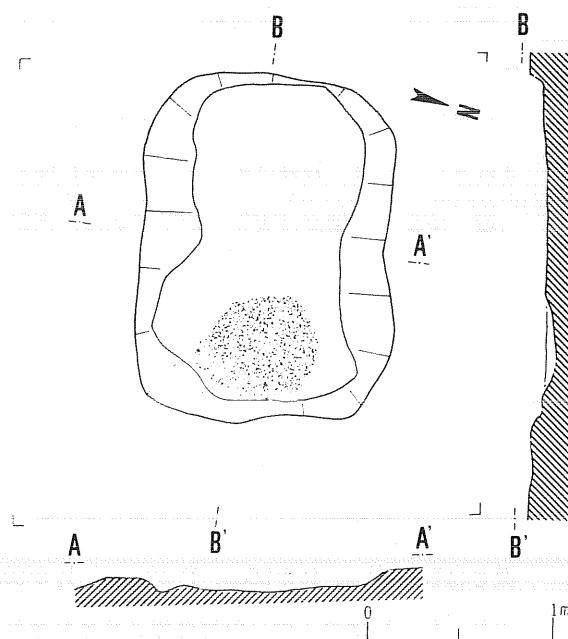
調査区外から検出された。鳥野遺跡より道路をへだてて50m程離れており、台地西側を走る谷の実際に検出された。上面はかなり削平されていた。

（遺構の確認） 表土下の地山で確認した。

（平面形・方向） 平面形は橢円を呈しており、長軸は1m90cm、短軸は1m30cmである。長軸は東西を向く。

（堆積土） 木炭粒を含む軟質の黒色土が堆積していた。東側に幅65×55cmの茶褐色土の入ったくぼみがあり、焼土が混入していた。

（壁・床面） 器高は最深で8cm、皿状に落ち込んでいる。



第8図 鳥野小豎穴遺構

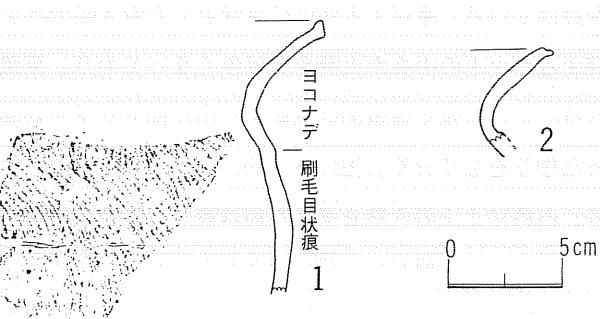
鳥野小豎穴遺構出土遺物（第9図）

小豎穴遺構内より多数の土師器破片が出土したが、実測図の記録できるものではなく、特徴的な土師器甕形土器の口縁部断面をのせた。この他に丸底を呈する内黒土師器杯の底部と口縁部が出土した。

第9図1は、赤褐色を呈しており、焼成は良好である。頸部に段をもち、外反する口縁部の先端は立ち上っている。調整については、頸部の段より下には縦方向のシャープな刷毛目状痕が残っており、口縁部にはヨコナデが施されている。内面は口縁部がヨコナデが施されているがその下方には調整痕はない。

第9図2は、淡黄色を呈しており、焼成はやや不良である。

口縁部が強く外反し、口唇部がやや突き出している。内外面ともに調整痕はない。



第9図 鳥野小豎穴遺構出土土器

源田平遺跡第1号住居跡（第10図）

源田平遺跡調査区の東側にあたる。

(遺構の確認) 大湯浮石層の浮いていた場所を四分し、地山まで掘り下げ、掘り込み面を確認した。

(平面形・方向) 平面形はほぼ方形を呈している。掘り込み面での長軸は4m45cm、短軸は4m5cmであり、長軸は磁北より35度東に向く。カマドは東側の長辺に設けられている。

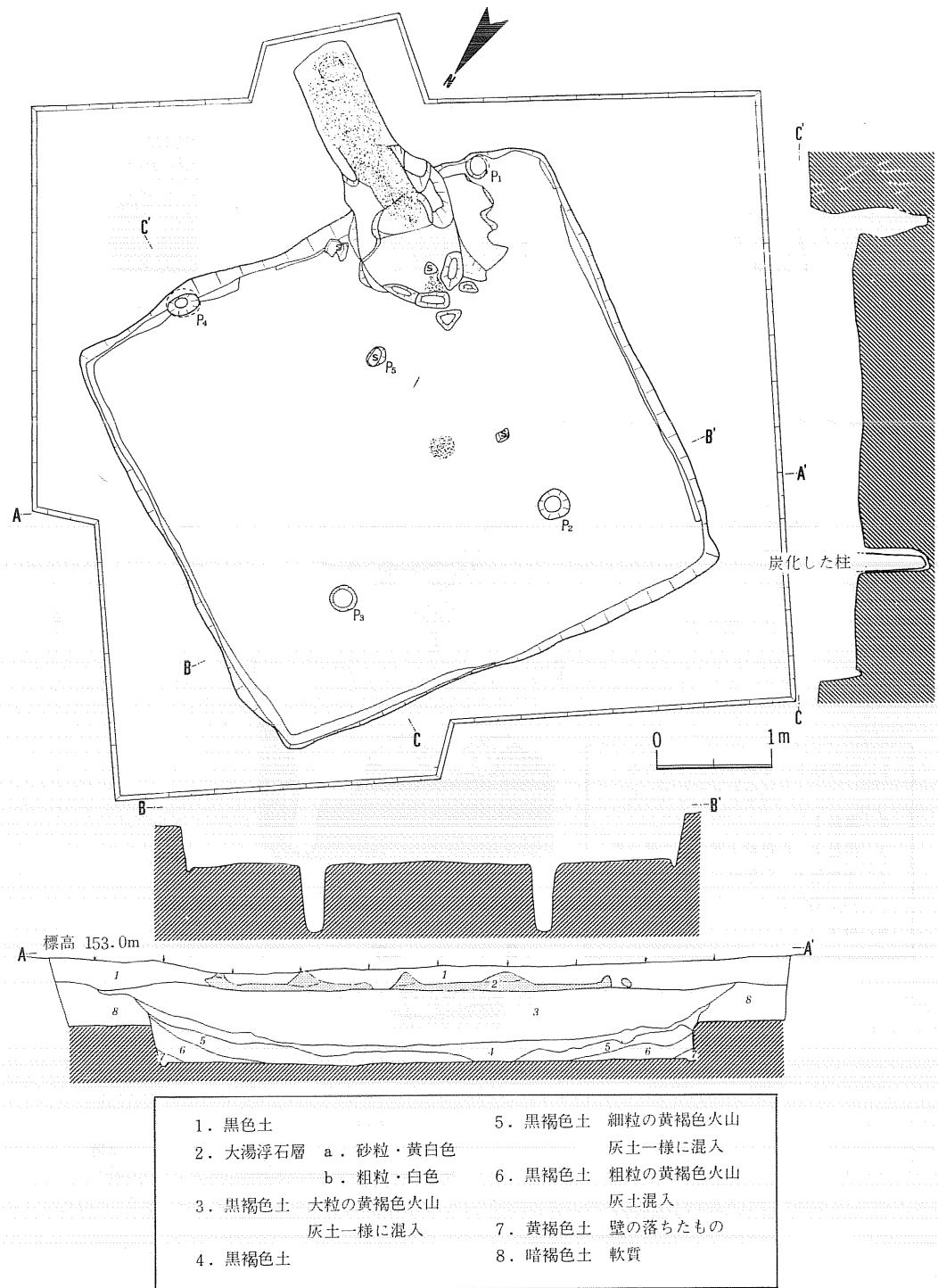
(壁・床面) 壁高は東壁・南壁で40cm、西壁・北壁で35cmであり、ほぼ垂直に落ち込み、地中の床面に達する。床面は平坦であり、やや黒色土が混入した状態で踏みかためられている。カマドの前庭部、カマドの両わきがかなりかたくなっている。

(周溝) カマドの周辺と西壁の南側を除き、壁に沿ってめぐっていた。北壁に沿った部分では幅5~10cm深さ8~11cmであり、南壁に沿った部分は幅4~8cmで深さ3cmであった。周溝のある壁際には軟質の黒色土が入り込んでいた。

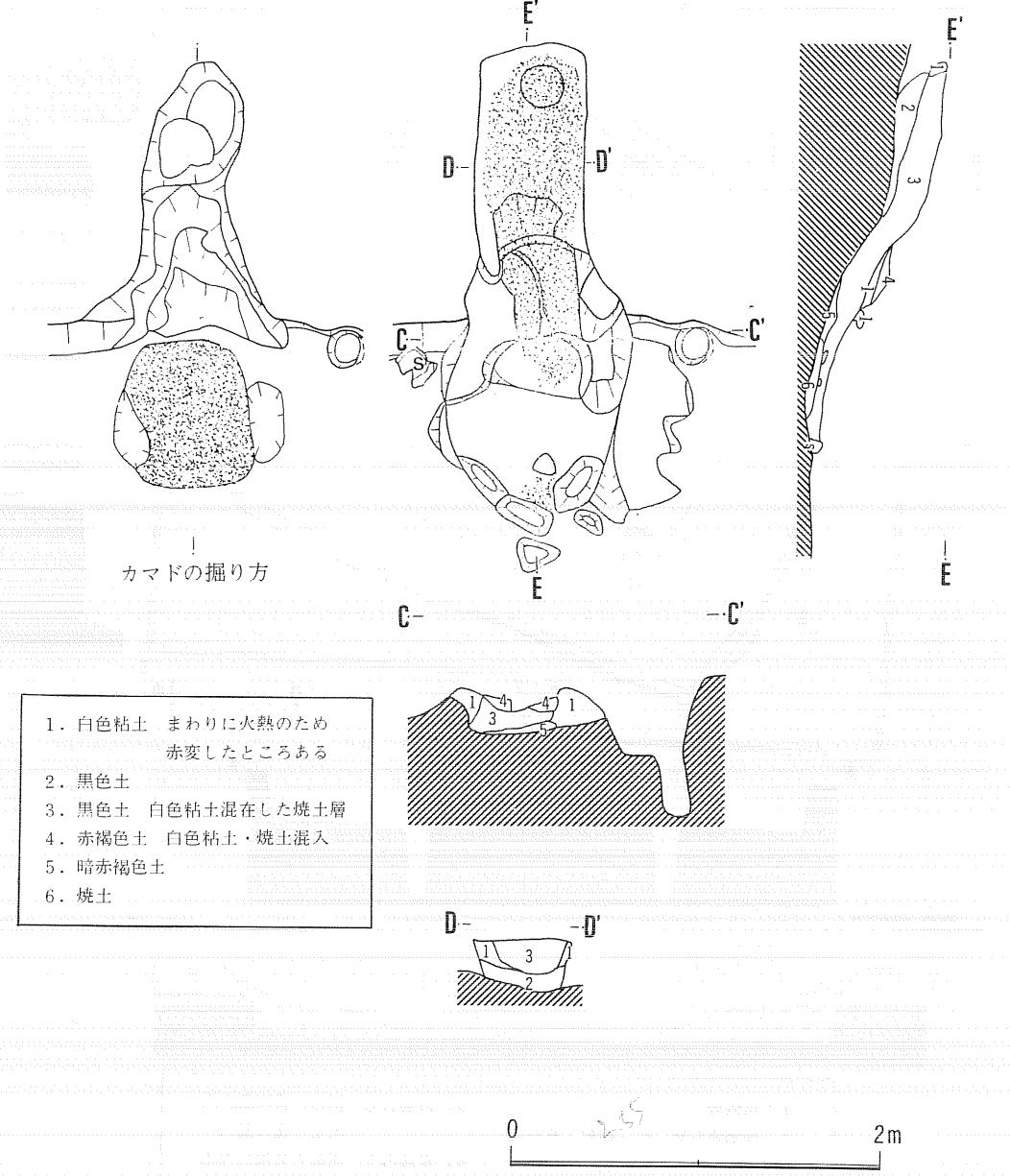
(柱穴) 住居内にはピットが5個あり、P₁、P₂、P₃、P₄が主柱穴と考えられる。床面からの深さはP₁が40cm、P₂が55cm、P₃が60cm、P₄が60cmである。柱穴の配列はP₁、P₄が東壁に接しており、P₂、P₃はコーナーの対角線よりそれぞれ内側に1m40~50cm内に入り、P₁、P₄と平行な位置にあるが、P₁がかなりコーナーに寄った位置にある。柱間の真芯距離はP₁~P₂間で2m85cm、P₂~P₃間で2m、P₃~P₄間で3mあり、以上により長方形の配列を考えた場合、P₁はカマドの真中の位置になければいけない。P₅は西壁より1m20cm離れてほぼ住居内の真中にある。直径18cmで深さ14cm上面に石がのっていた。P₁、P₄からの距離はそれぞれ1m80cmであり、主柱の補助的な柱と考えられる。P₃、P₄では柱の炭化したものが残っており、幅12cmであった。

(カマド) 東壁の南寄りに位置している。カマドは白色粘土によって構築されており、住居の内に焚口部と燃焼部を設け、住居の外に張り出す煙道部を設けている。燃焼部から煙道部にかけては上り勾配となり、東壁を幅80cmのU字状に掘り込んで、その上に白色粘土のカマド部分を設けている。遺存する袖部は東壁近くで最大幅95cmを測り、高さは床面より35cmであった。遺存するカマドの中央が火熱を受け赤くなつておらず、東壁近くの半月形の凹みが燃焼部と考えられる。これに続く煙道部は東壁より出た部分が厚さ10cmで比較的よく残っていた。先端が角ばった作りをしており、地山から10cm上っている。使用状況は床面に60×80cmの火床が残っており、白色粘土上の火熱を受けた面は長さ170cmで燃焼部での幅は25cm、煙道部での幅は50cmである。火床内に焼石が1個検出された。またカマド内より土師器甕など土器の出土が多かつた。

(その他の施設) カマド右袖に続いて白色粘土が広く残る部分があり、入口との関係も考えられる。



第10図 源田平第1号住居跡



第II図 源田平遺跡第1号住居跡カマド

源田平遺跡第1号住居跡出土遺物（第12図）

出土遺物は、住居跡内では土師器甕1と土師器杯1・2と須恵器杯が出土し、カマドからの出土が多かったが、東壁北コーナー部では土師器杯3、カマド右袖下に土師器甕2、西壁際では土師器甕3とバラバラに出ている。西壁際に鉄釘や住居跡中央床面より砥石が出土している。

土師器甕1（第12図-1） 口径26.0cm、高さ35.0cm。底径12.6cm。全体の三分の一が残る
〈色調・胎土・焼成〉 黄灰色を呈する。胎土には2~3mmの粗砂がまばらに混入しており、焼成は比較的良好である。

〈器形・調整〉 口縁部と胴部中位に最大径がある。底部からの立ち上りははっきりしており、胴が長く口縁部が短く外反し、口唇部は角ばっている。調整については、外面は大きく二段にわかれ、胴部中位から口縁部までロクロによる調整で、下半をヘラケズリした後、縦方向のナデを施している。ケズリのときの小石のうごきがスジとなって、下半に多く残る。内面はなめらかで、ロクロによる調整が施されている。胴部中位外面と口縁部内面に炭化物が付着する。

土師器甕2（第12図-2） 口径20.4cm、現高16.0cm。口縁部から胴部が二分の一残っている。

〈色調・胎土・焼成〉 内外面は黄灰色を呈するが、内面に黒灰色の部分がある。胎土には、2~3mmの粗砂がまばらに混入している。焼成は比較的良好である。

〈器形・調整〉 口縁部に最大径があり、胴部より張り出すように外反する。口縁部中位に稜をもち口唇部はやや突き出し、丸味をもっている。口縁は凸凹で波うっている。調整については、胴部外面に縦方向のヘラナデが内面は横方向のヘラナデが施されており、工具のあたりはのこっている。口縁部外面は指ナデしている。

土師器甕3（第12図-3） 口径12.8cm、高さ11.6cm、底径6.4cm。底部はあるが、口縁部は五分の一だけ残る。

〈色調・胎土・焼成〉 大部分は黄灰色を呈するが、黒色部分、暗褐色部分、赤褐色部分が斑状にある。胎土には、1~3mmの粗砂が混入し、かなり粗く、焼成も不良である。

〈器形・調整〉 口縁部および胴部上半に最大径がある。底部はやや丸味をもつが、胴部との境いは判然としている。胴部上半が張り「く」字状にくびれ、口縁部は短く外反する。口唇部は丸味をもっている。調整については、外面は底部が指頭ナデによりなめらかであり、胴部中位から下半も指ナデが施されており、口縁部はヨコナデがわずかに残る。内面はなめらかで、底面に指ナデが施されている。口縁部内面に炭化物が付着する。

土師器杯1（第12図-4） 口径14.0cm、高さ5.5cm、底径がおよそ5.6cmで口縁部が五分一程残っている。

〈色調・胎土・焼成〉 色調は明褐色を呈しており、胎土は緻密であるが、焼成は不良である。

〈器形・調整〉 体部はやや丸味をもって外傾する、底部は平底で体部との境いは判然としており、回転糸切り痕を残す。

土師器杯 2(第12図—5) 口径14.2cm、高さ 5.5cm、底径 5.8cm。口縁部は八分の一だけ残る。

〈色調・胎土・焼成〉 赤褐色を呈しており、胎土に砂混入するが、焼成は良好である。

〈器形・調整〉 体部はやや丸味をもって外傾する。底部は平底で体部との境いは判然としており、回転糸切り痕を残す。

土師器杯 3(第12図—6) 口径15.2cm、高さ 5.5cm、底径 5.8cm。口縁部から底部が二分の一残る。

〈色調・胎土・焼成〉 黄灰色を呈しており、体部上半に明褐色の部分がある。胎土に粗砂が混入するが、焼成は比較的良好である。

〈器形・調整〉 体部は下半に丸味をもつが、上半は直線的に外傾し、口唇部がやや突き出す。体部外面にロクロ調整痕の凸凹が残る。底部に回転糸切り痕を残している。体部上半に炭化物の付着がみられる。

須恵器杯 (第12図—7) 口径15.0cm、高さ 4.4cm、底径 5.8cm、底部は全部残っているが、口縁部は十分の一だけ残る。

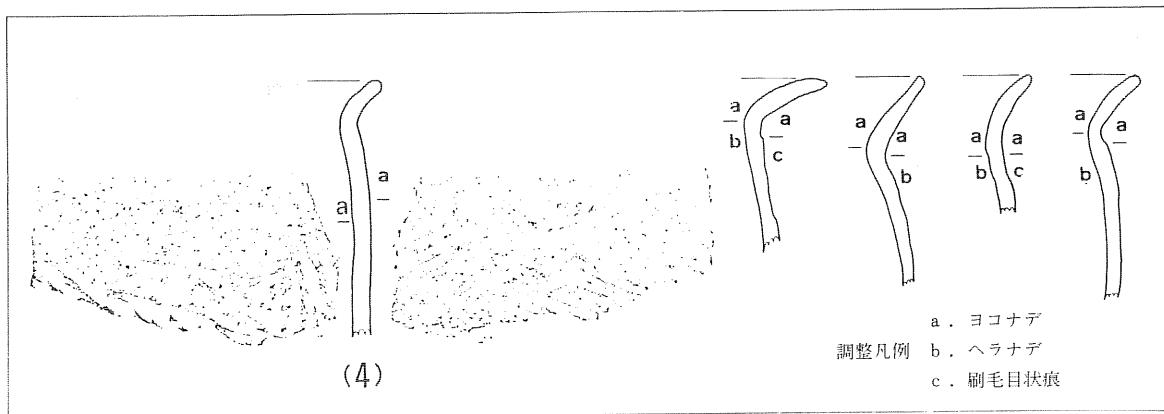
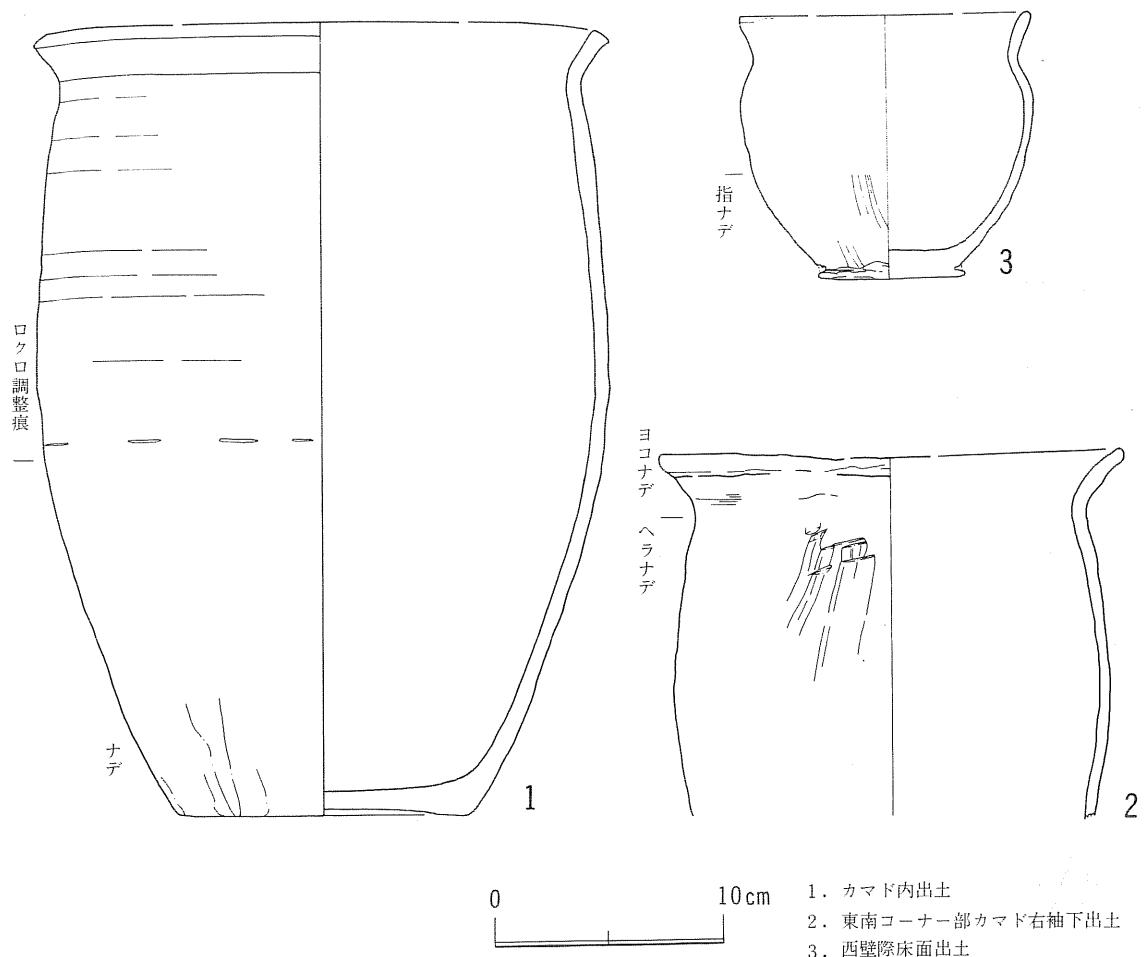
〈色調・胎土・焼成〉 灰色を呈しており、胎土は緻密でかたく焼きしまっている。

〈器形・調整〉 体部は底辺部近くがややくびれるが、直線的に外傾する。底部は平底であるが、かなり上げ底を呈する。体部との境いは判然としており、回転糸切り痕を残す。

土師器甕形土器の口縁部は、口縁部が短く外反しており、口唇部は丸味をもっている。調整は胴部外面がタテ方向の、内面は横方向のヘラナデが施されている。口縁部の内外面はヨコナデが施されている。(4)の胴部外面にはヘラケズリの後平行タタキ目痕が施され、内面にアテ板痕を残す。個々の調整については、第12図に凡例を示した。

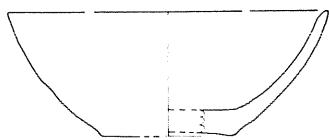
砥石 (第12図—8) 長さ12.7cm、幅 7.2cm である。長方形の四面を使っており、三面は全面を一面は3cm幅の皿状に使われている。石質は擬灰岩である。

鉄釘 (第12図—9) 長さ 7.0cm、幅 1.0cm、平たい段面で、形状はV字状を呈する。

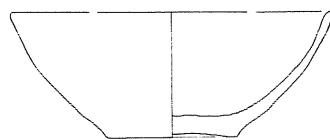


土師器甕形土器口縁部断面

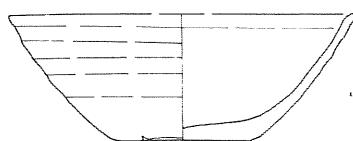
第12図(1) 源田平遺跡第1号住居跡出土遺物



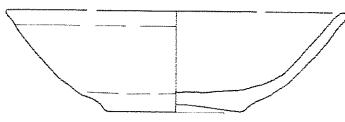
4



5

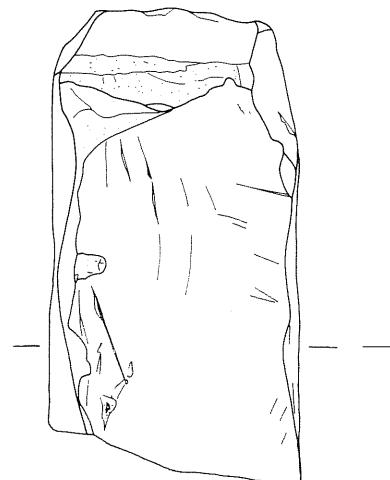


6

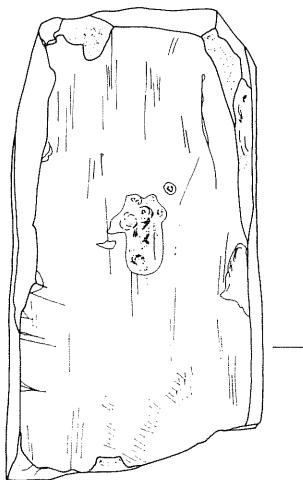


7

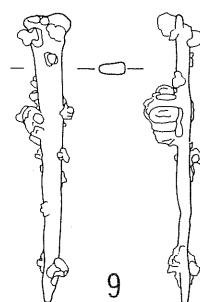
0 5 cm



8

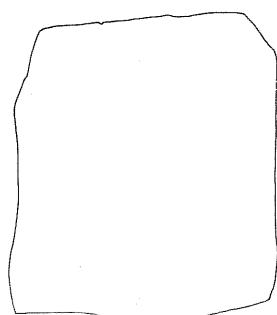


0



9

5 cm



4・7. カマド内出土

5. 埋土4層内出土

6. 北東コーナー部床面出土

8. 床面中央部出土

9. 西壁際床面出土

第12図(2) 源田平遺跡第2号住居跡出土遺物

源田平遺跡第2号住居跡（第13図）

舌状台地の中央部で検出された。

（遺構の確認） 第1号住居跡の調査で大湯浮石層の堆積する範囲と遺構との関係がはっきりしたのでさらに確認するために、土層観察のためのベルトは基準線にそって任意に設けられたが、まず耕作土をはがし、大湯浮石層の範囲を確認した。大湯浮石層のある範囲とその外側に暗褐色土と黒色土の境いがあり、遺構の掘り込み面かと考えられた。その後地山まで掘り下げ遺構を確認した。

（平面形・方向） 平面形はほぼ方形を呈している。掘り込み面での長軸は6m50cm、短軸5m80cmであり、長軸方向は磁北より50度西に向く。カマドは東側の長辺に設けられている。

（壁・床面） 壁高は、東壁・西壁・北壁で40cm、南壁で50cmであり、ほぼ垂直に落ち込み、地山中の床面に達する。床面は柱穴の内側は平坦であるが、柱穴の外側の北壁付近、南壁付近はやや軟弱である。カマド前庭部は踏みしめられて堅くなっている。中央部は火床面が広くみられる。

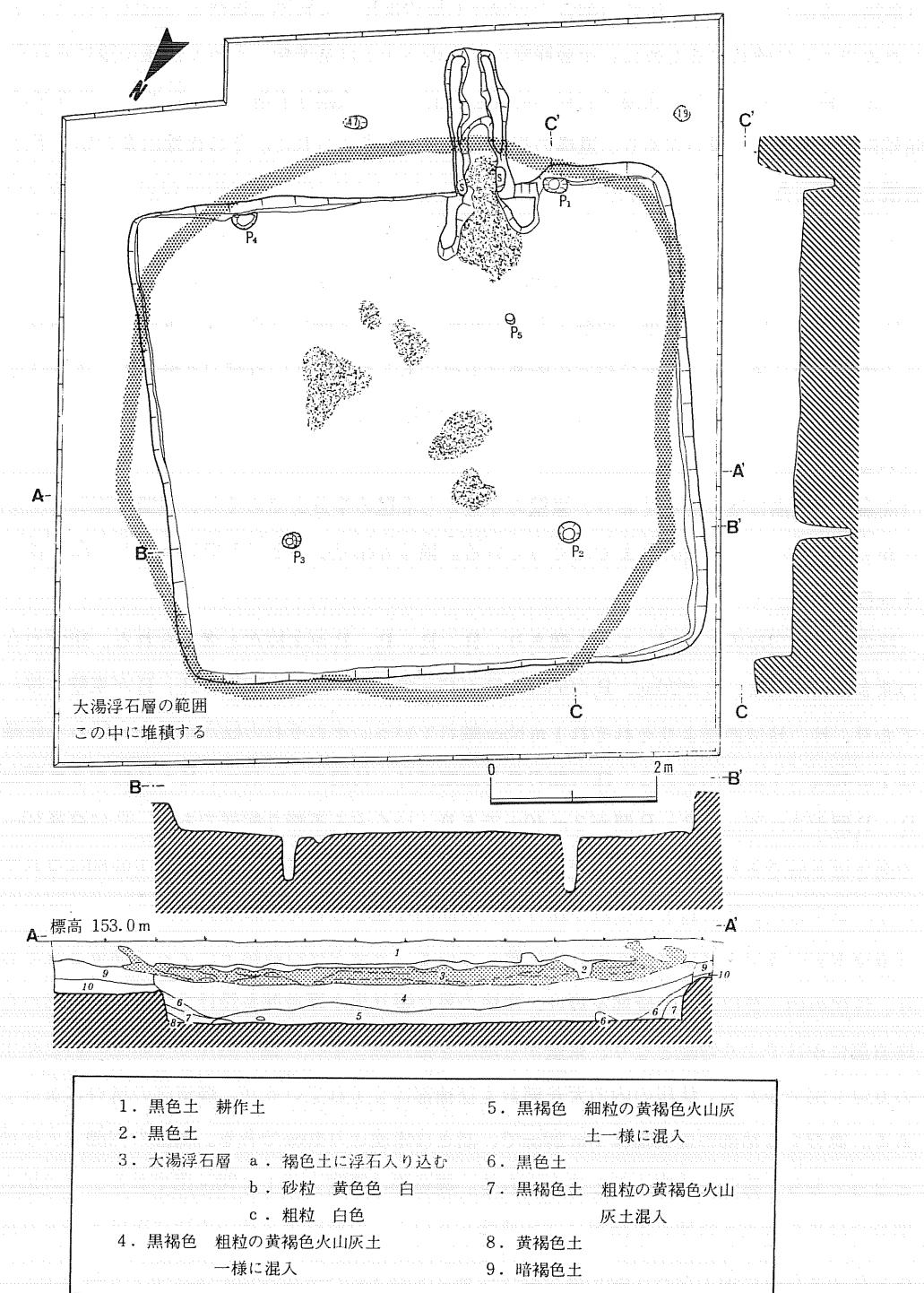
（周溝） 周溝は壁に沿っており、東壁の半分から北壁の半分までめぐり、西壁際南側コーナーから南壁に沿って東壁のP₁までめぐっている。幅は4cmで広いところで10cmあり、深さは4cm程である。

（柱穴） 住居跡内にはピットが5個あり、P₁、P₂、P₃、P₄が主柱穴と考えられる。床面からの深さはP₁が45cm、P₂が70cm、P₃が55cm、P₄が45cmである。柱穴の配列はP₁、P₄が東壁に接しており、P₂、P₃は西壁よりそれぞれ1m65cm離れている。それぞれの柱穴が壁から離れた距離は1m40cm～1m65cmである。柱穴間の真芯距離はP₁～P₂間が4m15cm、P₃～P₄間が3m95cm、P₁～P₄間が3m75cm、P₂～P₃間が3m40cmであり、いくぶん不整な配列である。P₅は直径10cmで深さは5cmであり、中に炭化物がつまっていた。P₁より1m65cm、東壁より1m60はなれている。第1号住居跡のP₅とは位置が違うが、補助的な柱とも考えられる。

（カマド） カマドは東壁の南寄りに位置している。カマドは白色粘土によって構築されており、住居の内に焚口部と燃焼部を設け、住居の外に張り出す煙道部を設けている。燃焼部から煙道部にかけて上り勾配となり、東壁から地山を幅70cmU字状に掘り込んでその上に白色粘土のカマド部分がある。住居の内の天井部および袖部はくずれているが、煙道部の遺存は良好である。遺存する袖部の最大幅は1m20cmで、高さは床面より40cmである。袖部の内側は火床面となっており、幅60cmの燃焼部と考えられる。煙道部は東壁より1m70cm出ており、つけ根の部分には半折された自然石を両側に立て補強している。白色粘土と地山の間に黒色土が入り込んでかぶせた白色粘土の天井部が落ち込んだようであり、火熱を受けかたくなつて立ち上りが残った部分もある。煙出入口は地山をU字状に掘り込んだ先端部分で白色粘土がやや上面にかぶさっている。使用状況は床面に65×65cmの火床が残っており、煙道部の落ち込んだ天井部分

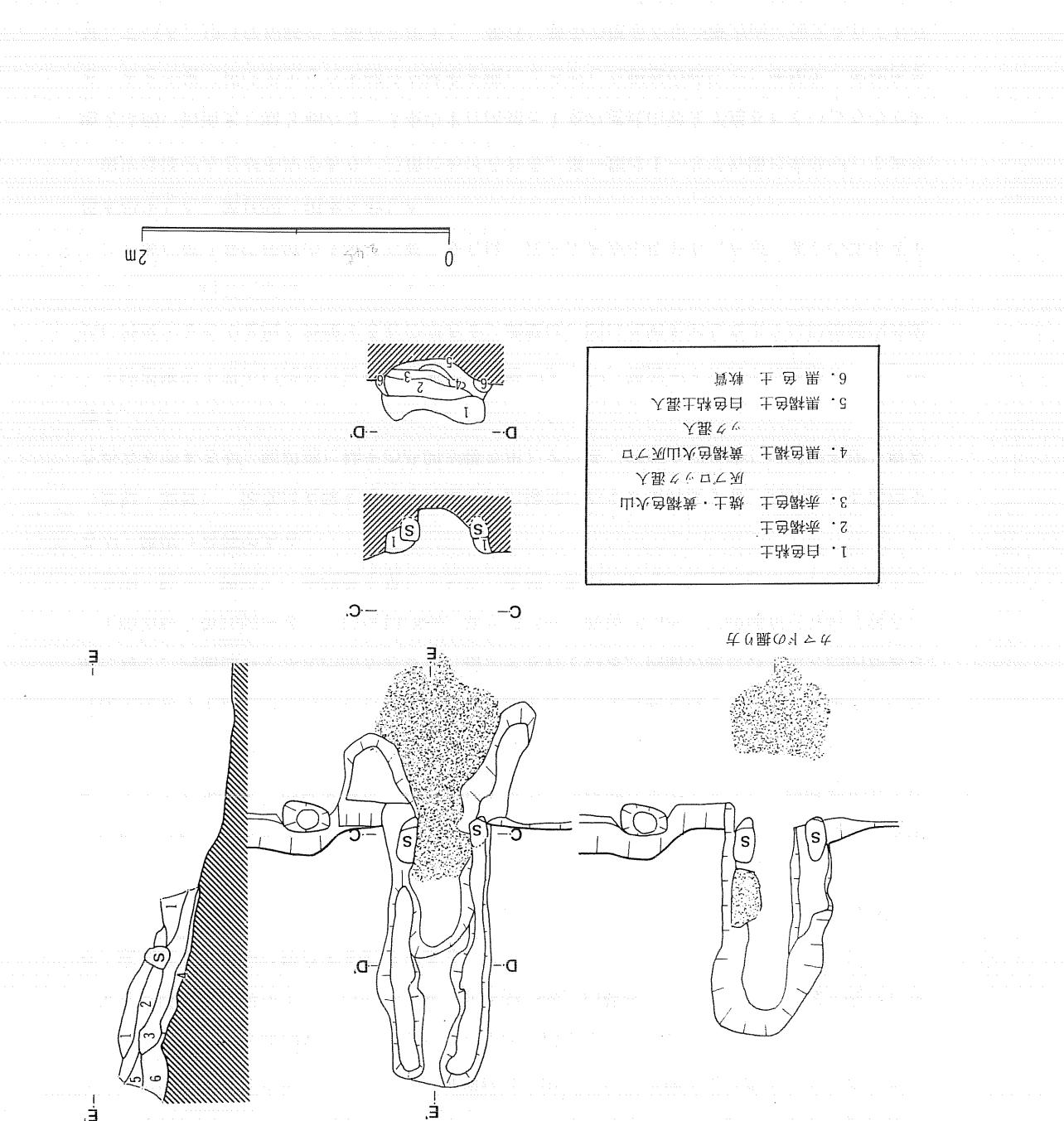
もかなり火熱を受けボロボロになっている。カマド内より須恵器甕、土師器甕が出土した。

(その他の施設) P₄の右わきにかなり厚い白色粘土の堆積があった。



第13図 源田平遺跡第2号住居跡

第14图 源田平遺跡第2号住居跡方丈



源田平遺跡第2号住居跡出土遺物（第15図）

埋土内より多量の破片が出たが、出土遺物から復元できる資料は少なかった。須恵器甕形土器は、住居跡内のカマド、東壁際など内からバラバラになって出土しており、土師器甕の破片はカマド付近から多く出土している。土師器杯は大湯浮石層下の埋土より出土している。なお大湯浮石層の下からは50個以上の弥生式土器小片が出土した。

須恵器甕（第15図-1） 口径18.2cm、高さ33.5cm。口縁部が三分の二でいちばん残っており、底部までわずかに接合する部分がある。

〈色調・胎土・焼成〉 赤銅色を呈しており、口縁部から胴部の上半には、黄緑色の自然釉が付着している。胎土に砂が混入するが比較的緻密で焼成はきわめて良好である。

〈器形・調整〉 長胴であり上半に最大径を27.4cmを測る。なだらかな肩部から口縁部がほぼまっすぐ立ち上がり、口唇部では、強く張り出しが、口縁部は半面をのこし、口唇部をケズリとられている。調整については、口縁部から胴部上半は内外面ともロクロで調整されているが、外面中位より下はヘラケズリされ、底部近くには平行タタキ目痕を残している。外面タタキ目痕に対し、内面はいくぶん凸凹があるが、指ナデされている。内面の底はいくぶん凸凹がある。

土師器杯（第15図-2） 口径13.8cm、高さ5.4cm、底径6.4cm。口縁部が三分の二残る。

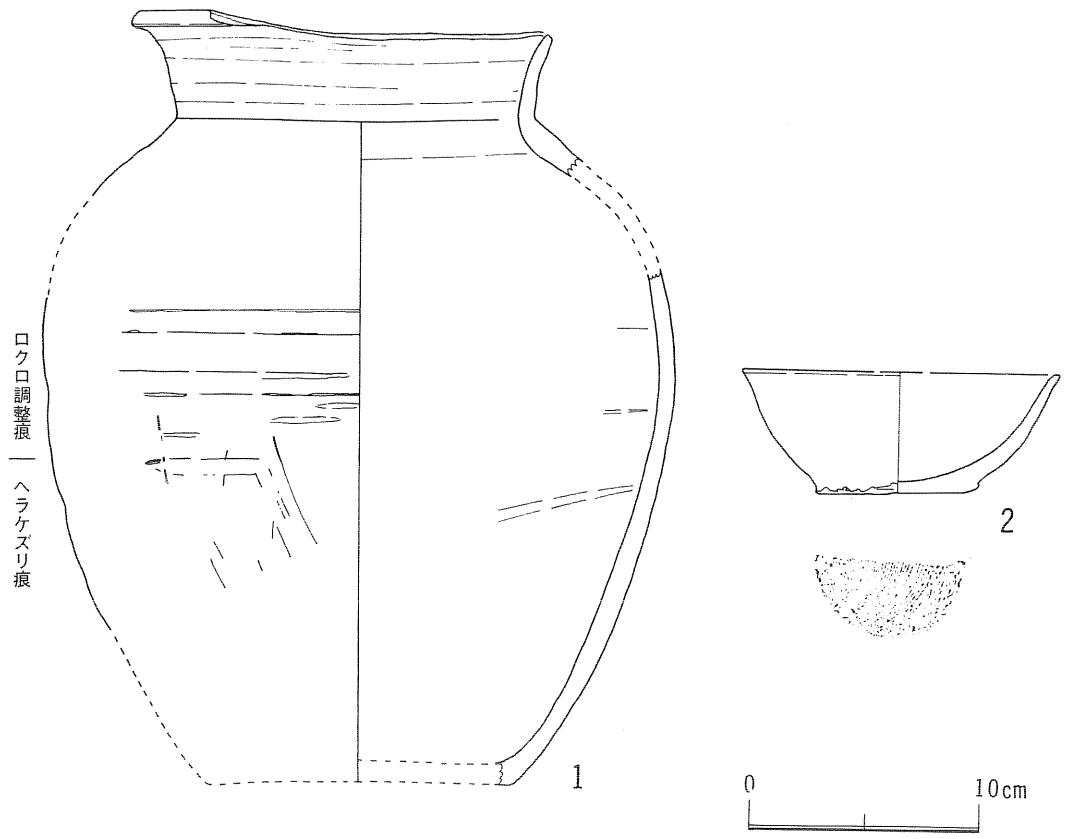
〈色調・胎土・焼成〉 赤褐色を呈しており、底部に黒斑がある。胎土に砂がわずかに混入するが、焼成は良好である。

〈器形・調整〉 体部は丸味をもって外傾し、口縁部はわずかに外反する、内外面とも器壁がなめらかであるが、底辺部に粘土の凸凹が張り出している。底部の切り離しは回転糸切り痕を残す。

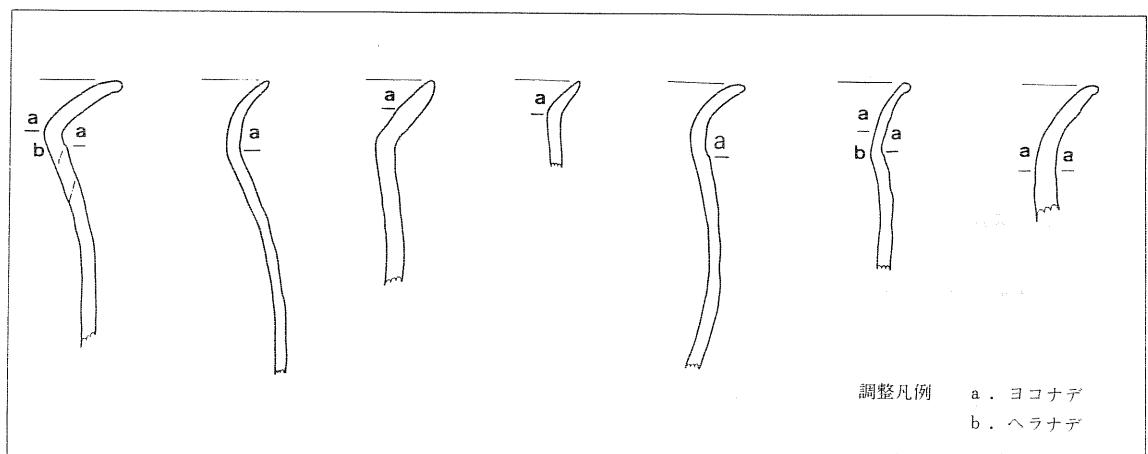
土師器甕形土器の口縁部は比較的ちがつた特徴があるが、頸部がくびれて口縁部が「く」字状に外反するものと短く外傾するものがある。調整は、図に凡例を示したように口縁部内外面がヨコナデで胴部内面はヘラナデである。

この他に第2号住居跡の大湯浮石層下からは、ほとんどが小片であったが、多くの弥生式土器が出土した。第16図に拓本を示した。

破片はほとんどが小片であり、二類にわけられる。第一類は1～3で外面に朱塗がしてあり、地文は細い斜縄文で幅2mmの2～3条の平行沈線と1条の連続山形文が施されているものである。あの第二類は出土した大部分が撚糸を縦にころがした胴部の破片で、赤褐色、黄褐色を呈している。12は住居跡の上面から出土し、帶状に数条の撚糸が糸が縦方向に施文されており、小坂×式に比定される。

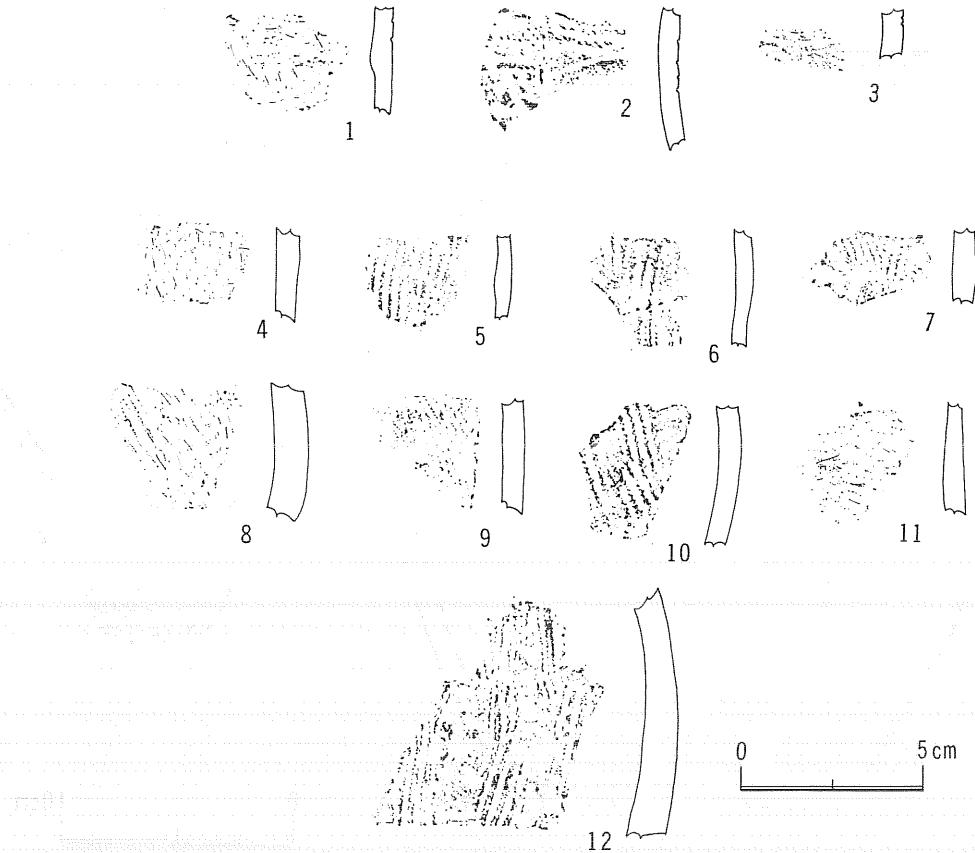


1. カマド内・東壁際より出土
2. 埋土4層内出土



土師器甕形土器口縁部断面

第15図 渡田平遺跡第2号住居跡出土遺物



第16図 源田平遺跡第2号住居跡埋土出土土器

IV その他の出土遺物

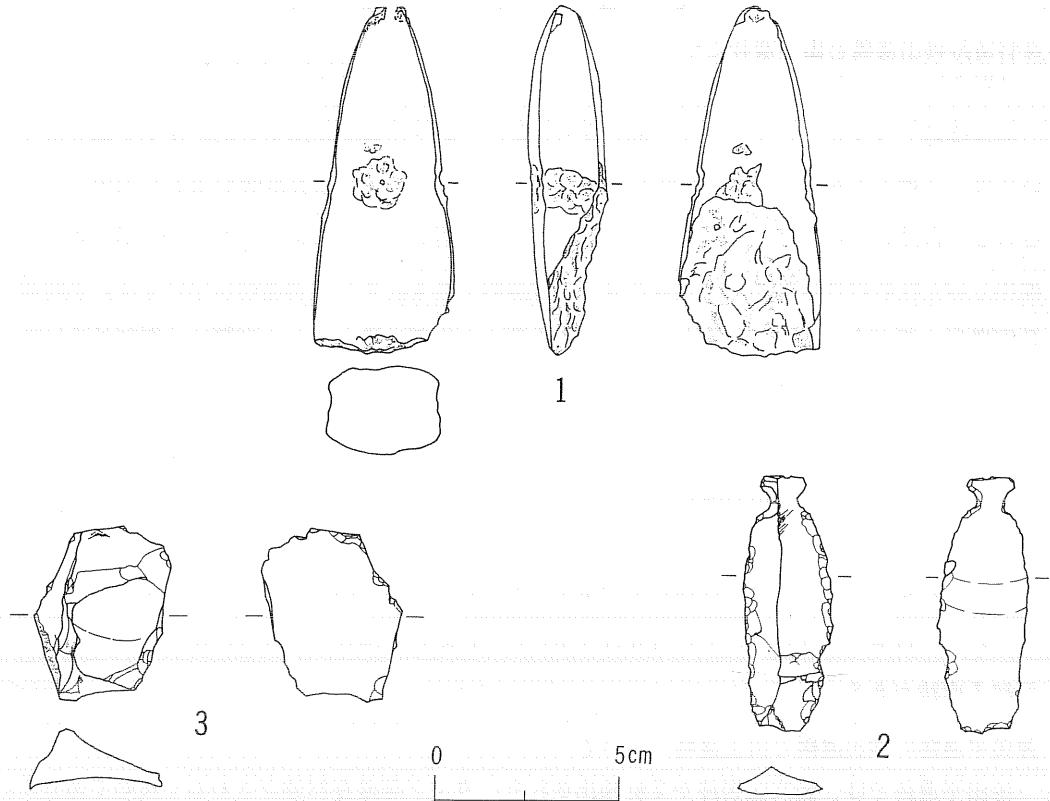
源田平遺跡で表採された石器

磨製石斧（第17図-1） 長さ 9.5cm、最大幅 4 cmである。刃部は欠損している。柄の装着によるものであろうかほぼ中央部分の表・裏・両側面にあらい凹みがある。

石匕（第17図-2） 縦形で長さは 7 cm、最大幅は 2.4cmである。断面は三角形で片面のみ細部の加工がされており、つまみ頭部方向よりはがされた剥片を加工している。

剥片石器（第17図-3） 長さ 4.5cm、最大幅が 3.5cmである。

各石器の石質は 1 が珪岩、2、3 が頁岩である。



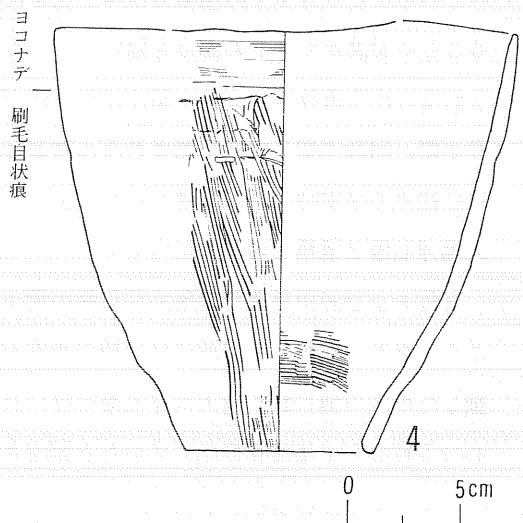
第17図 その他の出土遺物 (1)

鳥野露出住居跡出土土器

顕形土器 (第17図-4) 口径20.2cm、底
径 8.2cm、胴部下半はよく残っているが、口
縁部は六分の一しか発見できなかった。

〈色調・胎土・焼成〉 赤褐色を呈しており、
胎土は緻密であり、焼成も良好である。

〈器形・調整〉 無底の顕であり、台形をし
ている。調整については、口縁部より下に幅
2.5cmでヨコナデが施されており、その下方は
縦方向のシャープな幅1~1.2cmの刷毛目状
痕が残っており、刷毛目がかなり重なりあつ
ている。内面のヨコナデは外面より下にくる
が、その下方は横方向に幅1.2cmで刷毛目状
痕が残されている。



第17図 その他の出土遺跡 (2)

V まとめ

鳥野遺跡検出遺構と出土遺物について

鳥野遺跡では、竪穴住居跡が1軒検出された。四分の一程を発掘しただけであり、規模・平面形は確認できなかったが、カマド周辺から多数の土器や土製品が出土した。カマド部分については、△袖部天井部を自然石で補強していること△袖芯に土師器長胴甕形土器を利用していること△自然石土器底部を支脚に使用していること△煙道部は地山をトンネル状に掘り込んで煙出し口を住居の外に設けていることなどが特徴的である。また出土遺物については、土師器長胴甕形土器が多く△頸部に段をもつこと△木葉痕が底部に残ること△調整は、胴部外面に縦方向の刷毛目状痕を内面に横方向の刷毛目状痕を残し、口縁部をヨコナデしていることなど特徴といえる。またヘラミガキのある内黒土師器が出土しており、また各種の土製品が出土している。こうしたことから竪穴住居跡の年代は、8C後半の奈良時代末と考えられる。
注(1) 類例がもとめられる。そうしたことから竪穴住居跡の年代は、8C後半の奈良時代末と考えられる。なお調査区外の小竪穴遺構および露出した住居跡からも同時期と考えられる土器が出土しており、台地上には集落のある可能性が濃い。この時期に関連する周辺の遺跡としては、平元館Ⅰ遺跡がある。

源田平遺跡の検出遺構と出土遺物について

源田平遺跡では、竪穴住居跡が2軒検出された。カマド等遺存状態がきわめて良好であった。二軒の住居跡の構築方法は、△平面形がほぼ方形を呈すること△主柱穴が4本でカマド側の2本が壁に接しており、住居跡中央に補助柱1本をもつこと△カマドの位置が東壁の南寄りについていること△カマドの構築方法は、壁をU字状に掘り込んでその上に白色粘土で構築していること△周溝がカマドの部分を除いてめぐることなど共通しており、同時期に存在したと考えられる。出土遺物は少なく、胎土に粗い砂が混入し、「く」の字状に頸部がくびれる土師器甕形土器、回転糸切りで切り離された土師器杯などであった。竪穴住居跡の年代は10C後半から11C初めの平安時代後半と考えられる。

大湯浮石層と遺構との関連について

鳥野および源田平遺跡の竪穴住居跡の埋土中には大湯浮石層の厚いレンズ状の堆積があり、こうした厚く堆積した場所には遺構の存在が考えられた。そうしたことから源田平遺跡では発掘した地区の他に数ヶ所大湯浮石層の浮いた場所があり、規模の大きい第2号竪穴住居跡を中心にして5軒ほどで集落を形成していたと推定される。大湯浮石層の年代は、10C後半以降、平安時代末と考えられる。

注(1) 秋田県教育委員会「秋田県文化財調査報告書第39集「下藤根遺跡発掘調査報告」昭和51年

注(2) 平山次郎・市川賢一「1000年前のシラス洪水」地質ニュースNo. 140号 昭和41年

調査中、北海道大学林謙作氏よりご教示を得、参考となりました。末尾ながら感謝いたします。

図版1



鳥野遺跡遠景（矢印は露出した住居跡）



鳥野遺跡発掘作業風景



全 景 (上)

カマド (下)

図版 3



鳥野遺跡住居跡カマド



遺物出土状況



石の配置状況



鳥野遺跡住居跡カマド

土器と石の配置状況
(中央に土器使用の支脚)



石の配置状況



煙道と煙出し口



鳥野遺跡発掘状況

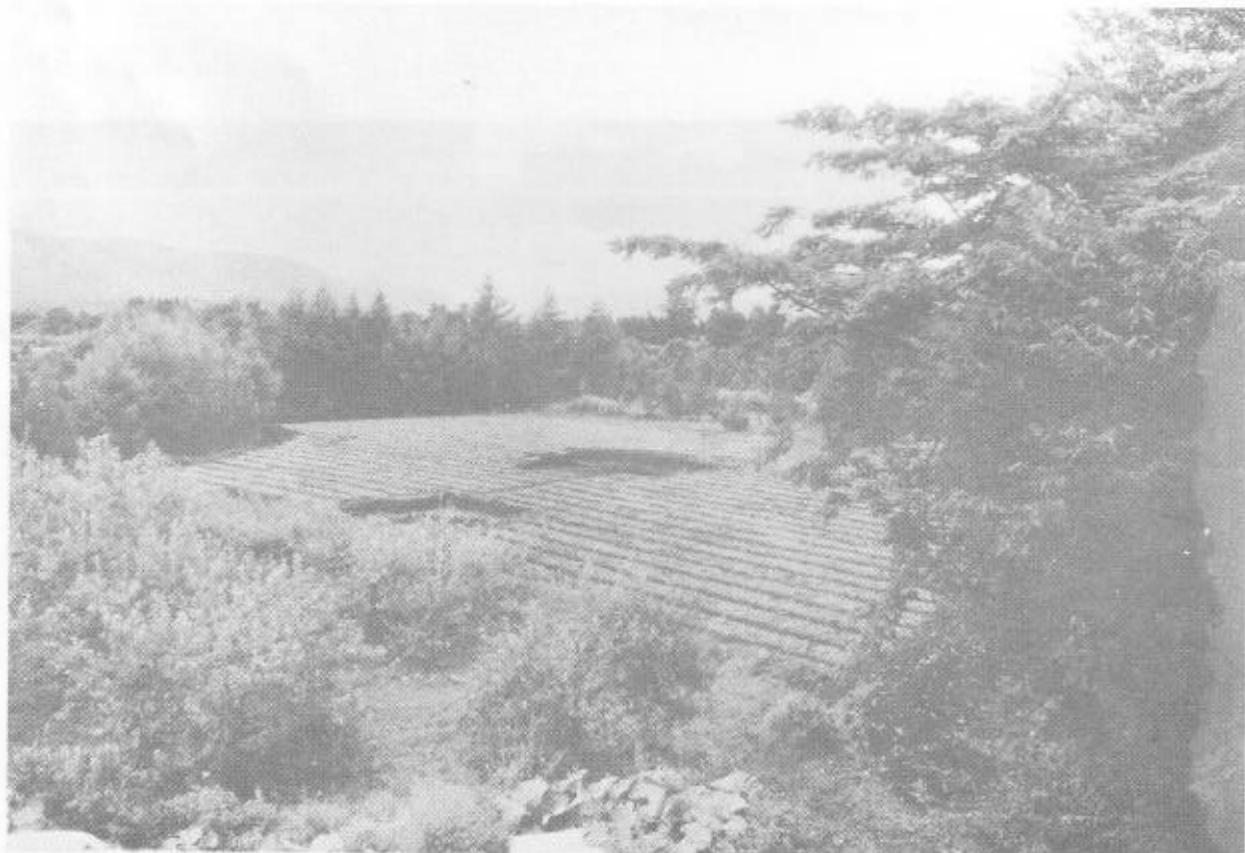


鳥野小豎穴遺構

図版 6

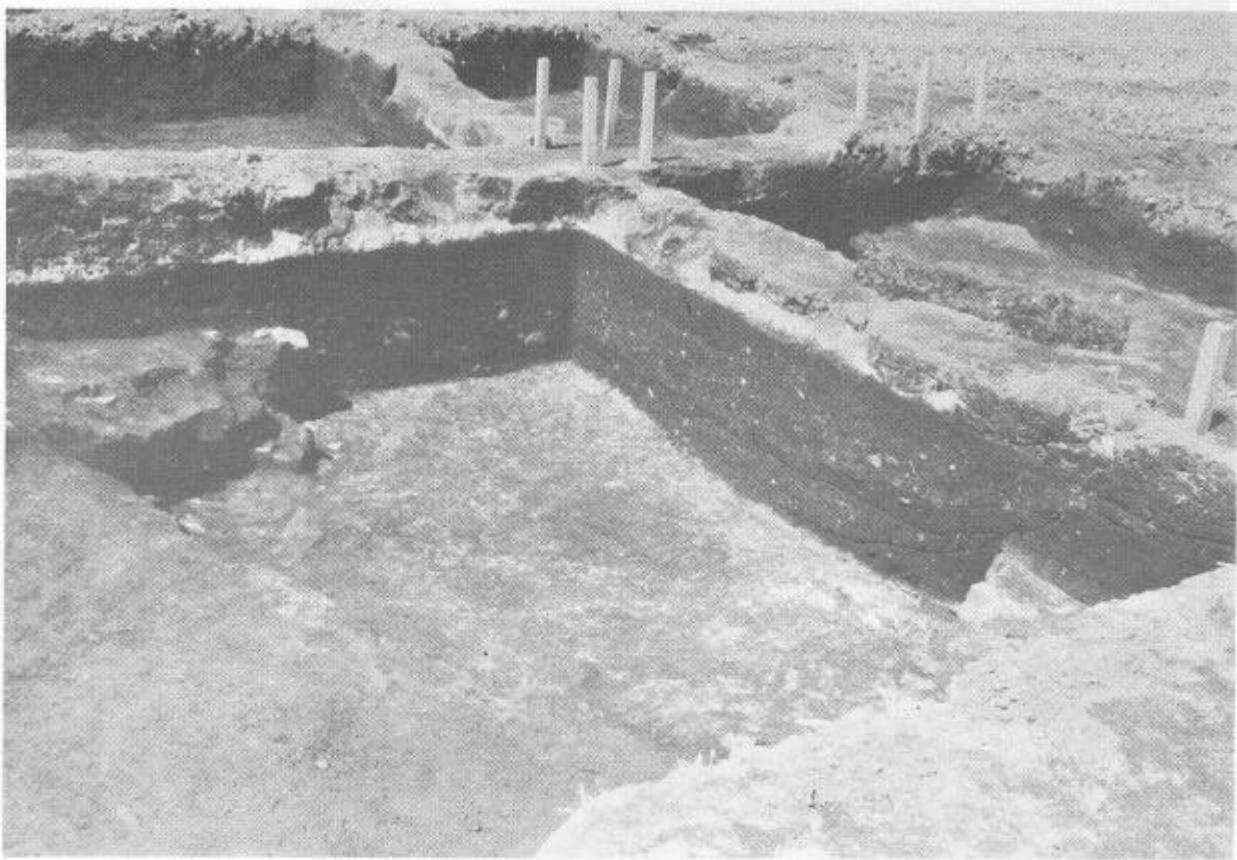


源田平遺跡発掘作業風景



源田平遺跡遠景

図版 7



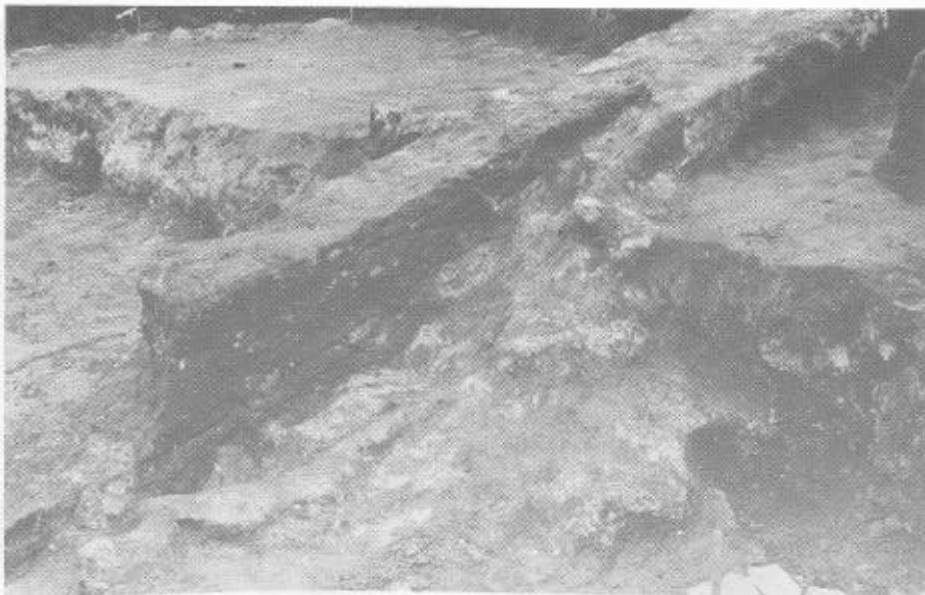
源田平遺跡第1号住居跡

埋土の状況（写真左にカマド）



住居跡全景

図版 8



源田平遺跡

第1号住居跡カマド

カマド上面の土層



カマド全景



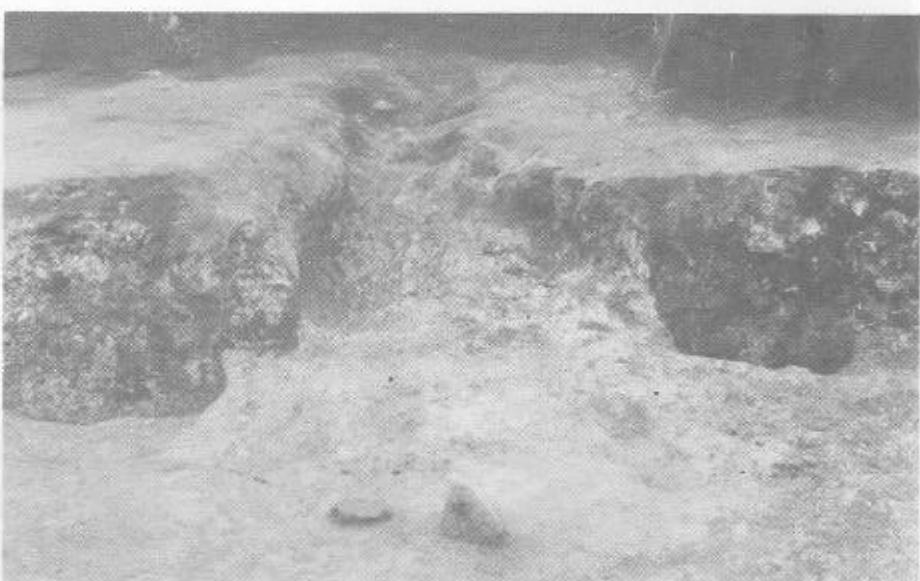
煙道部

源田平遺跡
第1号住居跡カマド

燃焼部



カマドの掘り方



P₁ の炭化した柱



図版 10



源田平遺跡第2号住居跡

住居跡を履う大湯浮石層



埋土の状況

図版 11



住居跡全景

源田平遺跡第 2 号住居跡



カマド全景

図版 12



源田平遺跡第2号住居跡カマド

カマド近景



煙道部断面

図版 13

源田平遺跡第 2 号住居跡

カマド煙道部先端断面



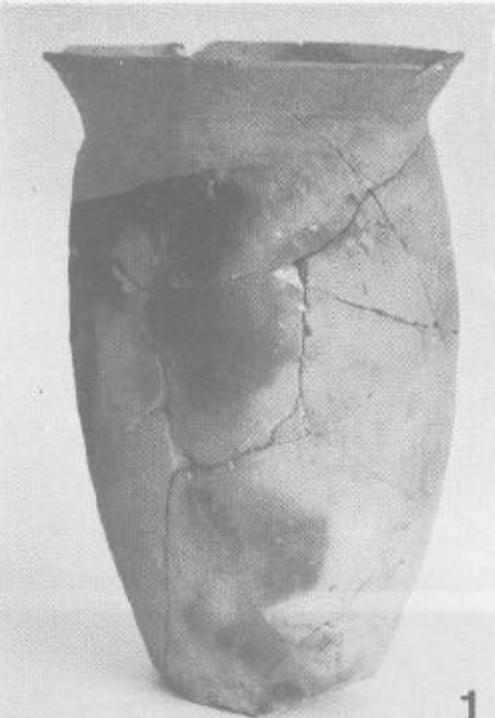
カマド掘り方



柱穴と柱痕跡



図版 14



1



2



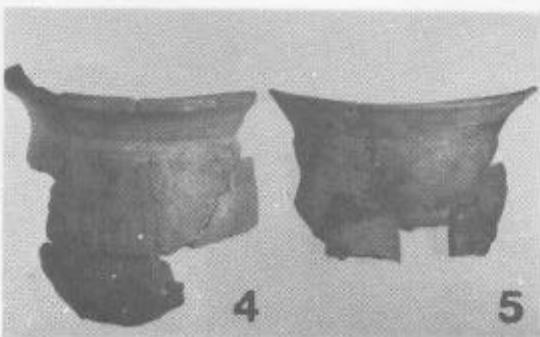
3



6

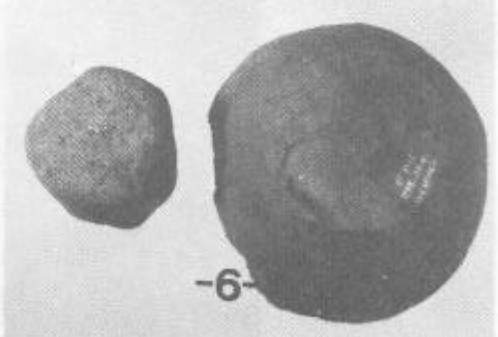


7



4

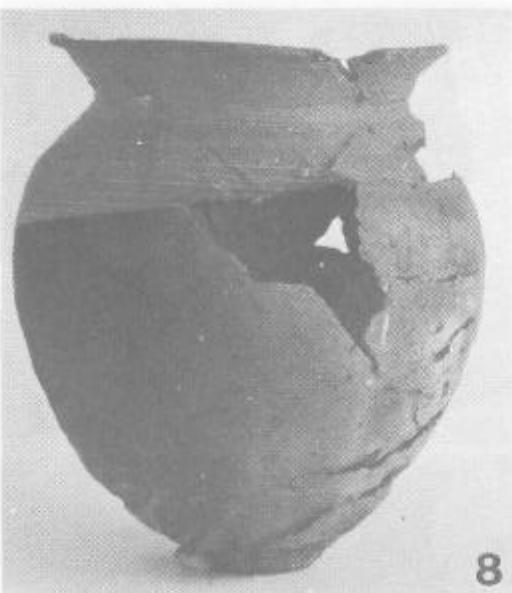
5



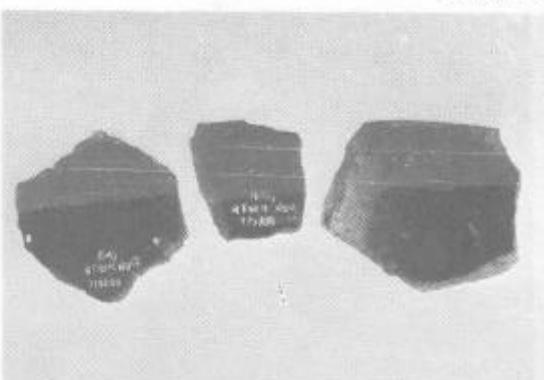
-6-

鳥野遺跡第1号住居跡出土遺物(1)

支脚に使用された土器と石



8



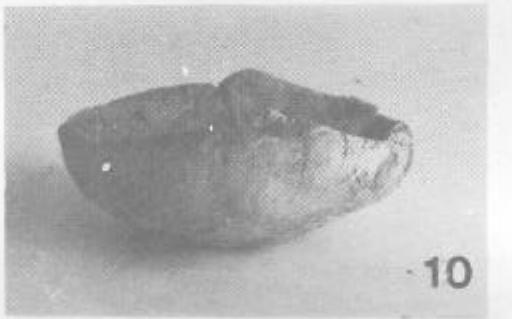
カマド右袖近くより出土の内黒土師器



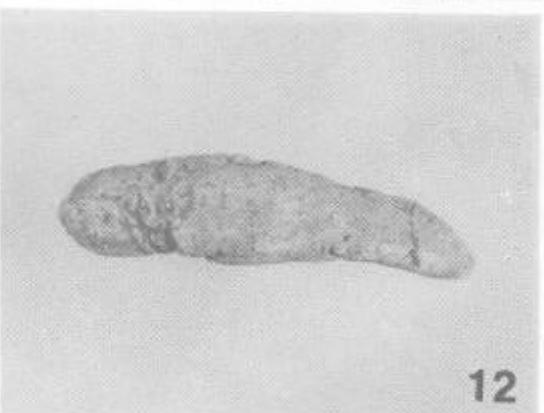
輪積み痕を残す土器



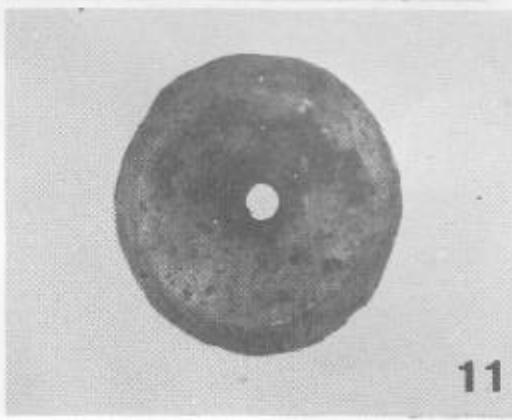
9



10



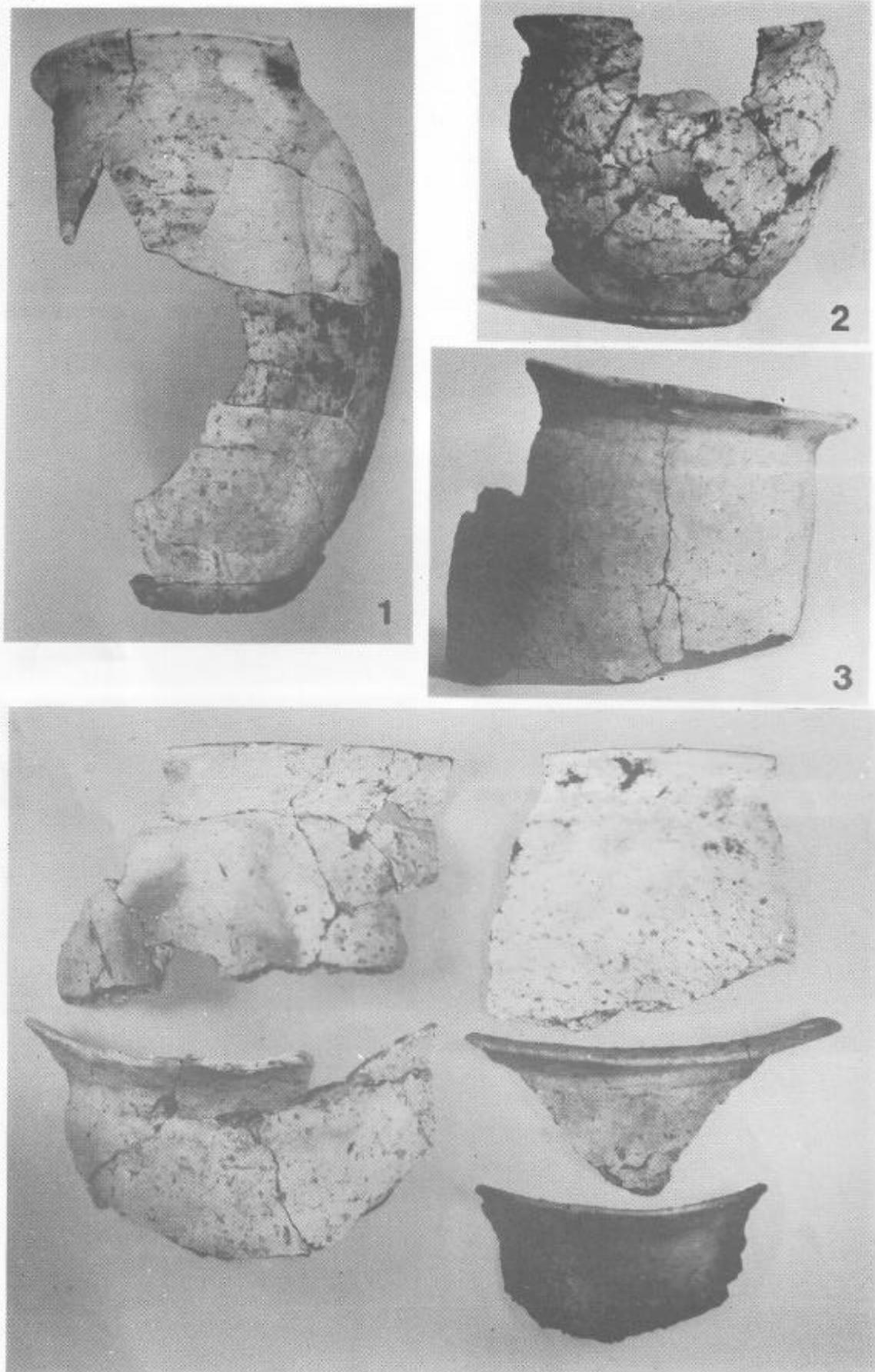
12



11

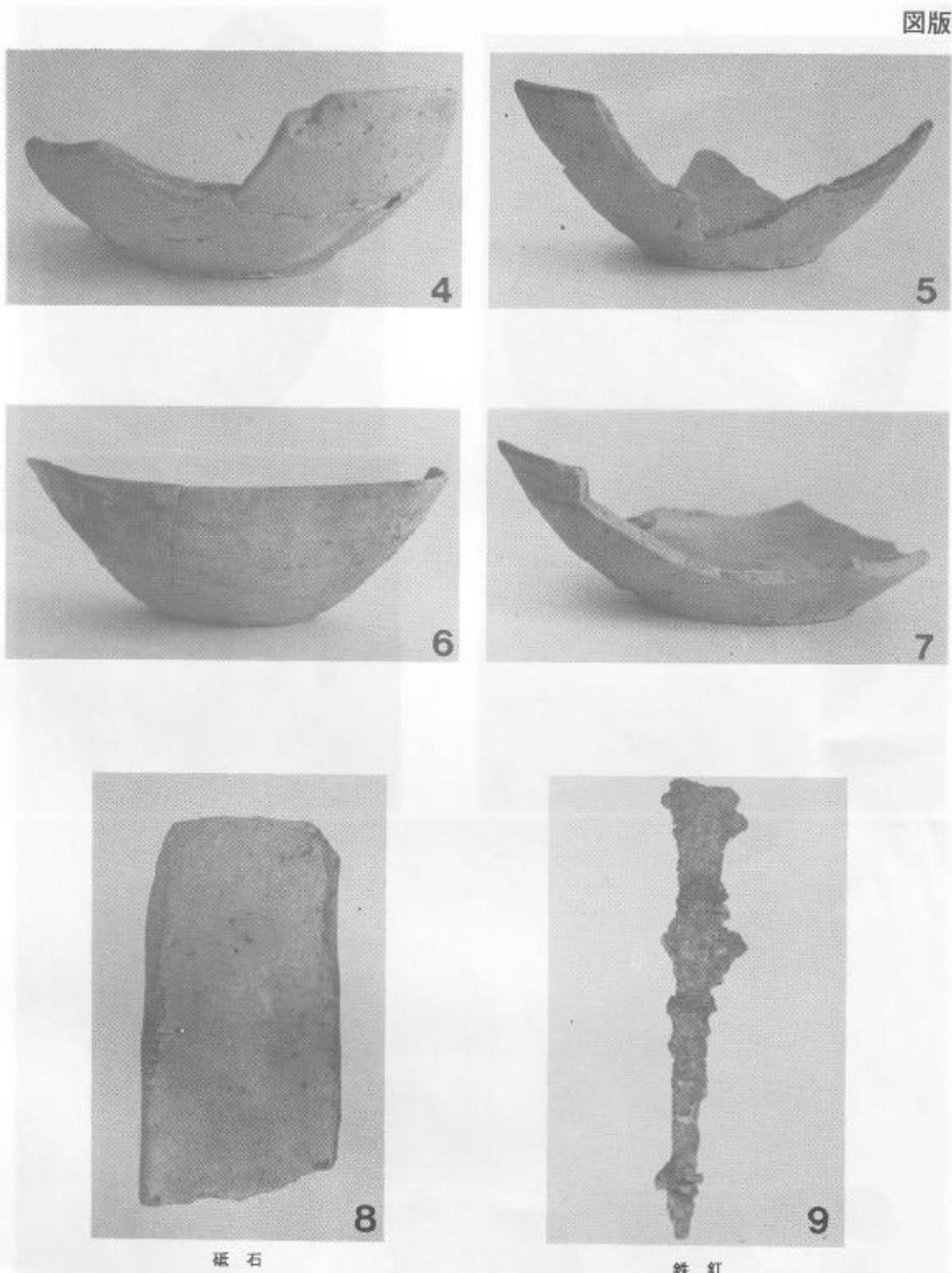
鳥野遺跡第1号住居跡出土遺物(2)

図版 16



源田平遺跡第1号住居跡出土遺物(1)

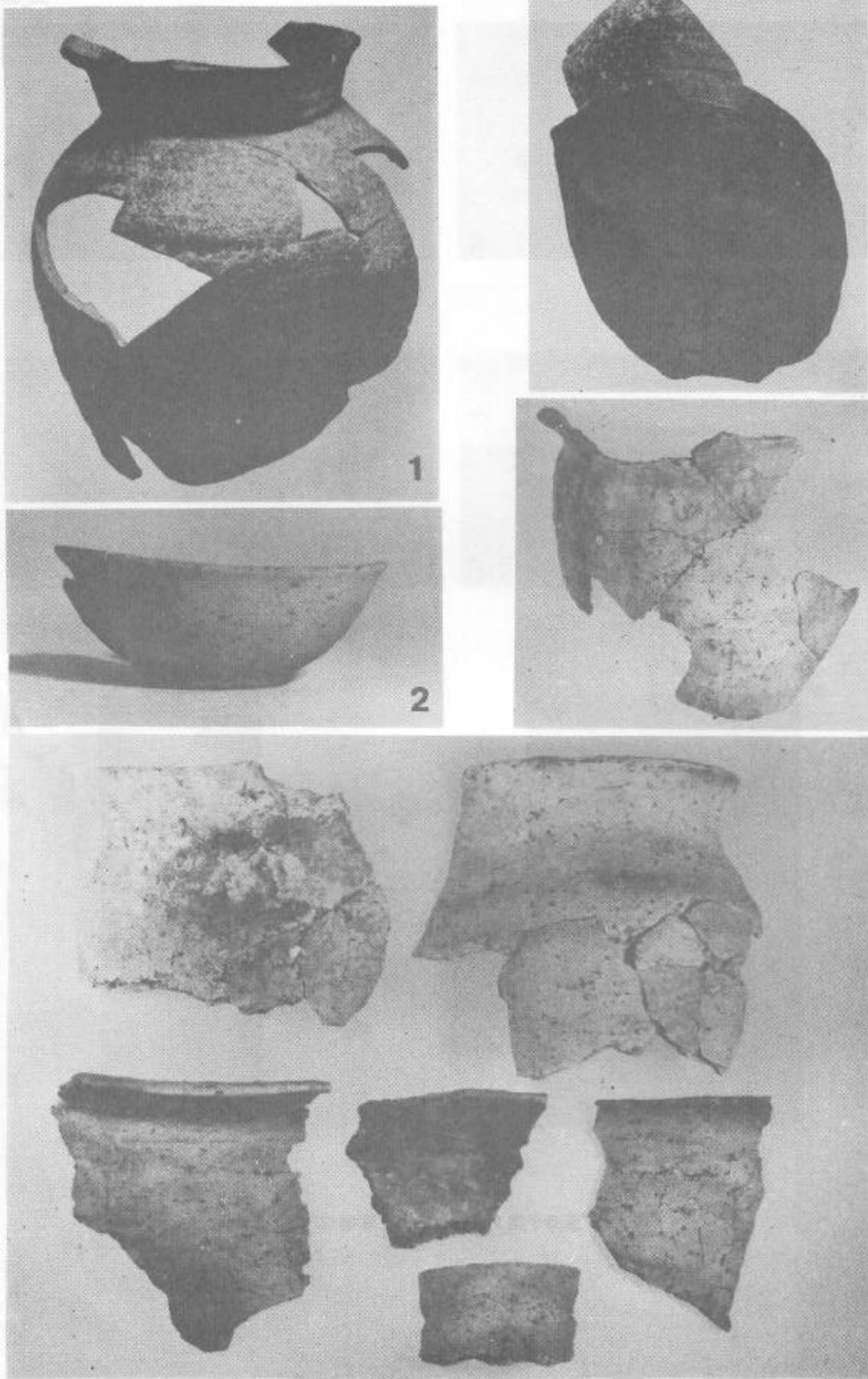
図版 17



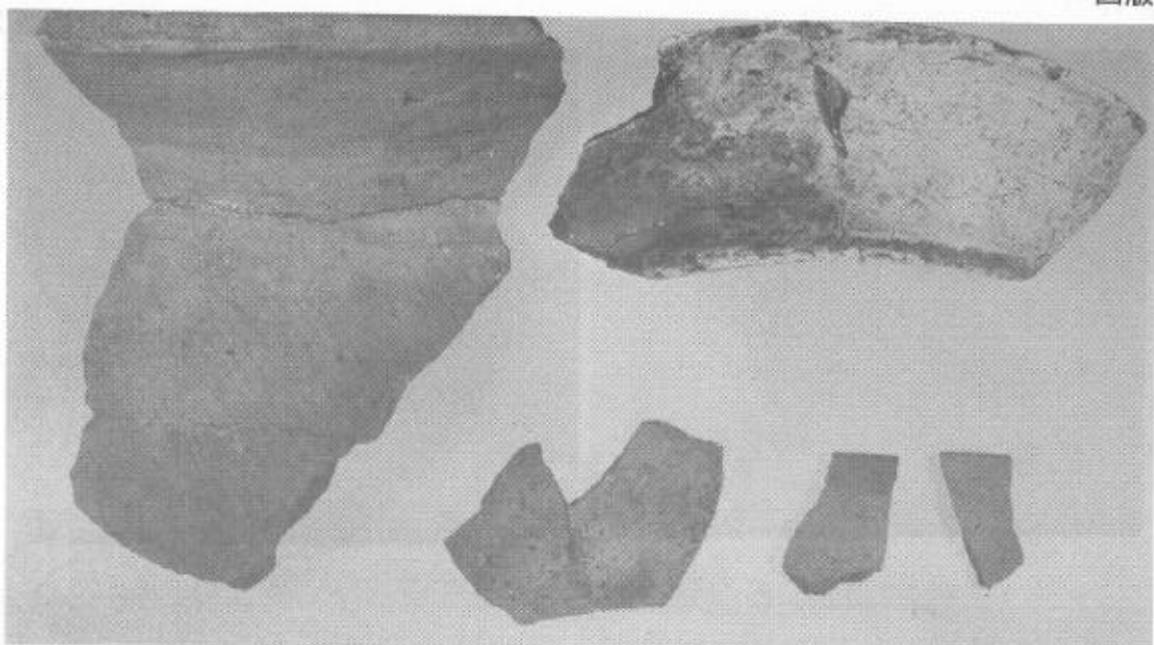
源田平第1号住居跡出土遺物(2)

伊藤大輔著「近畿の古墳と古文化」

図版 18



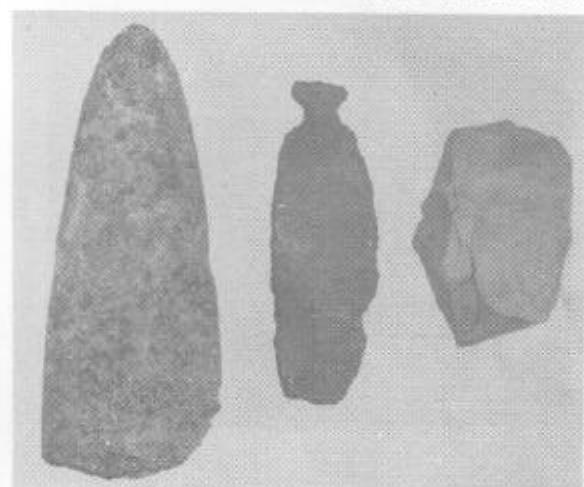
源田平遺跡第2号住居跡出土遺物



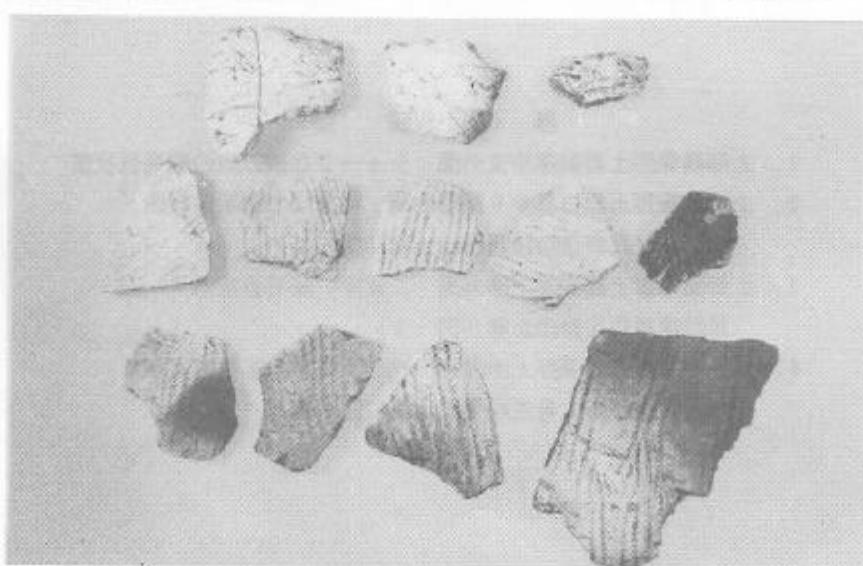
鳥野小竪穴遺構出土器



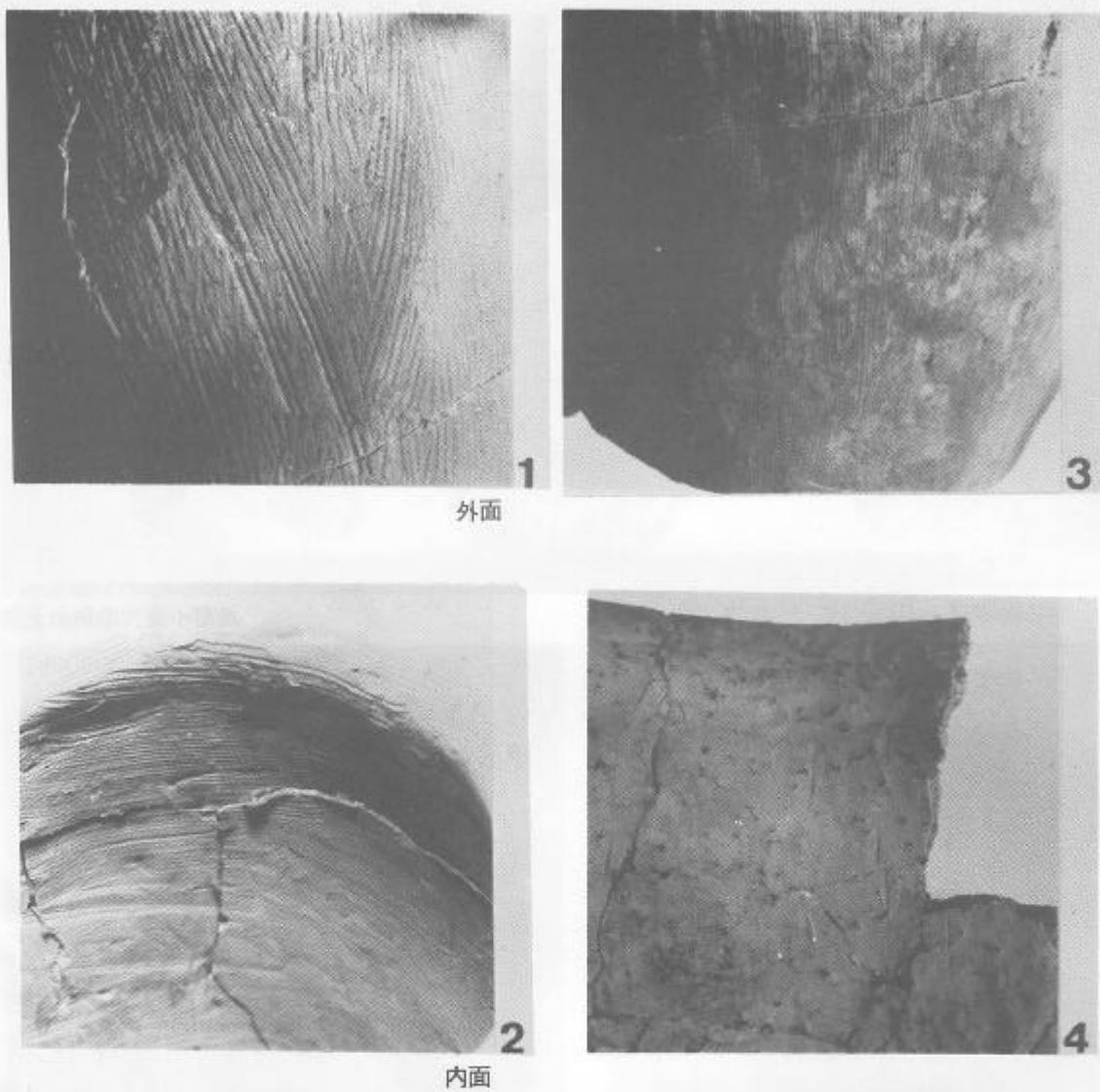
鳥野露出住居跡断面出土土器



源田平遺跡表採



弥生式土器—源田平第 2 号住居跡埋土内出土と表採—



器面調整

1. 土師器變形土器胴部中位外面 シャープな縦方向の刷毛目状痕
2. 土師器變形土器口縁から胴部内面 横方向の刷毛目状痕
(1、2は鳥野遺跡住居跡出土第7図-1)
3. 土師器變形土器胴部下半外面 こまかい刷毛目状痕
(鳥野遺跡住居跡出土第7図-2)
4. 土師器變形土器胴部上半内面 ヘラナデ痕と工具のあたり
(源田平遺跡第1号住居跡出土第12図-3)